
彼に代わってピッチャー元カノ（仮）

鈴ヶ岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼に代わってピッチャー元カノ（仮）

【Nコード】

N9470W

【作者名】

鈴ヶ岳

【あらすじ】

全ては主人公である女子高生、姫野麗華の自殺からはじまる。

幽体となって自分の死体を見下ろす麗華に、天使と名乗る初老の男が話しかけてくる。

その内容とは。

「麗華の元カレ、藤村仁の魂が悪魔に持ち去られてしまったから、彼の魂を取り戻すまで、彼の肉体に憑依して「藤村仁」になりすまして欲しい」

というものだった。

だが、仁は普通の高校生ではなく、将来を嘱望されたピッチャーだったのだ。

野球経験のない麗華は仕方なく承諾するが。

チームメイトたちの気持ちはバラバラで、その原因が仁のワンマンな性格によるものだと、麗華は思い知らされる。

仁にとっては最後の。

麗華にとってははじめての夏の大会が始まるのだった。

*このサイト以外でも2つのサイトで連載しております。

天使フィリップ

死んでやる

それは乙女のプライドだった。

今ここで死んでやる

空も。

麗華に共鳴している。

暗雲が立ちこめ、一瞬で真つ暗になり、雷鳴が轟く。

私は乙女のプライドを貫き通すのよ、ざまあみるミルクめ

雷が。

近くに落ちたようだ。

えいっ！

つかの間彼女は白鳥になった。

いやいや、そんなに綺麗じゃないから、アヒルかな。

空も校庭も、見慣れた町並みも、大きなブランコのように、ゆら

りと上になり下になる。

死ぬ気まんまんの飛べないアヒルは、重力のまま落下する。

校舎裏の駐車場の、アスファルトが目の前に迫ると、視界はブラ

ックアウトした。

暗闇の中で、ゴキン、グシャンと骨の碎ける音だけが響いた。

いくつかの本で読んだ臨死体験のとおり、暗くて狭いトンネルを

すごいスピードで昇っていく感覚。

死んでやる

「……………てくれ……………」

このまま死んでやる

「……………たす……………くれ……………」

え？

「助けて……………くれ」

なに？

「助けてくれ」

誰よ？

目を開けてみると。

いつの間にか空は、綺麗な夕焼けに戻っていた。

麗華は屋上とアスファルトの中間くらいで浮いている。

足下に自分の死体がある。

夕陽に照らされ、黄金色に輝く絨毯のように広がった血の池に、浮かぶように。

軀はまだケイレン中で、ダンサーがフィニッシュのポーズをとるみたいに手足を伸ばして、そこで動かなくなった。

頭から顔にかけては、粘土のボールを床におとしたように潰れている。

あたしは死んだ

乙女のプライドを貫き死んだ。

蝉時雨が、静寂を一層引き立てていた。

「たのむ、助けてくれ」

「きやあつ！」

「感慨に浸っているところを悪いんだが」

「誰よあんだ」

それは初老のおじさんだった。

ついさっきまで高校生だった麗華には、年齢まではわからなかったが、髪の毛の半分以上が白い。

ウィーン少年合唱団みたいな白装束を着て、古ぼけたショルダーバッグを肩から下げ、麗華と同じ高さで浮いていた。

そういえば、昔のテレビでドリフターズがコントでこんなかっこうしてたっけ

「天使だよ」

男はいった。

「あんだが？」

「フィリップでいいよ」

「じゃあ、あんたがあたしを天国に連れてってくれるんでしょう?」

「いや、それが……」

フィリップは困った顔になり、

「ちと事情があつてな、少しばかり手を貸してもらいたいんだが」と言いにくそうに言った。

「じゃあ、さっきから『助けてくれ』って言ったの、あんただったの?」

「まあね」

「『まあね』って、あたしはたつた今死んだばかりなのよ、ふつうあなたがあたしを助けるんじゃない」

「だからそこをなんとか……」

麗華は「いやよ」という言葉を喉元で呑み込んだ。

このフィリップとかいう、インチキ臭いジイサンが本当に天使だとしたら、下手に機嫌を損ねたら、天国どころか地獄に落とされるかもしれない、と考えたのである。

麗華は一度大きな溜息をついてから、

「なによ事情って」

とフィリップをにらんだ。

「ある人に憑依してもらいたいんだが」

「憑依して、どうすんのよ?」

「その人に成りすまして、何日か過ごして欲しい」

め、めんどくさい

「あたしはね、生きるのが嫌になったから自殺したのよ。それをまた生き返れだなんて……」

フィリップは「そこをなんとか」と言いながら、シヨルダーバツグからなにやら分厚い百科事典のような本を取り出し、パラパラとめくって「ああ、あつた」と一つのページに目を留めた。

「姫野麗華くんね。自殺の理由は……家庭内の揉め事と、学校で特定の女子から日々繰り返し返される、嫌がらせ。いわゆるイジメとい

「うやつか……うーん、男性問題もあるようだね」

と、まるで市役所の市民課の職員のように、事務的に独り呟いた。

「自殺にしてはやや安易な動機だが、最近の若いコはずいぶん簡単に死ぬんだね、私も忙しくてかなわん」

最後は皮肉っぽく毒づいて嗤った。

「あなたには関係ないでしょう？その特定の女子ってやつから、あたしがどんな仕打ちをされ続けてきたか、あなたになにがわかるっていうのよ」

麗華がたまらず声を荒げると、

「確かに」

とフィリップは本から視線を上げて、上目遣いに麗華を見た。

「確かに私には関係ない話だが、君たち若い人は自殺をするということがどういう意味なのか、わかってないようだね」

フィリップの視線の鋭さに麗華は一瞬気を吞まれた。

「な、なによ意味って」

「霊界では自殺は大罪なのだよ」

「え……えええっ！」

「まさか君、死後に天国に行ける、なんて思っていたんじゃないかね」

「そこまで高望みはしてないけど……じゃあ、地獄に行くの？」

フィリップは目を閉じて、ゆっくりと首を振った。

「地獄以下、つまり論外、ということだよ」

「う、うそ……」

「考えてもみたまえ、霊界から人間界に転生するということは、修行のために送り出されたということなんだよ、自殺をするとは、その修行を自ら放棄したという意味になるわけなんだね、これが」

「じゃあ、どうなるの、あたし？」

「霊界の刑法三十一条にのっとり、霊界の森へ追放されるのだよ」
フィリップは、哀れむような視線を麗華に向け、今度は裁判官のように重々しく低い声で言い放った。

「えええつ……つて、それだけじゃ意味わかんないんだけど、それってどういうことなのよ」

「つまり、広い霊界の中には、これまたとてつもなく広い森があるんだが、その森の奥深く、深くふかーいところで、木になって何万年、何十万年も動けずに、誰とも会話できずに過ごすという刑なんだね、これが」

話を聞きながら麗華の顔がひきつっていく。

それは、気が遠くなるほどの永きにわたる、孤独と拘束という絶望を意味していた。

「あの……じゃあ、その、あんたを手伝えば、そうならないようにしてくれるってどういうの？」

「約束するよ」

「その、憑依する相手の人って誰よ？」

「藤村仁」

「えええつ？」

その名前は麗華を愕然とさせた。

「君もよく知っている人、だね」

「ちよ、ちよつと……ジンが……なんで、また？」

藤村仁。

名前はヒトシと読むが、麗華は「ジン」と呼んでいた。

彼は麗華の中学時代の同級生であると同時に、県内でも有名な高校野球のピッチャーだった。

本人もそれを鼻にかけて、ちよつと天狗になっているところもあったが。

将来を嘱望され、このあたりではちよつとした有名人だった。

そして、直接ではないが麗華の自殺の原因の一つでもあったのだ。

「彼はね」

フィリップはこれまでで一番厳しい顔つきで、遠くをながめて言った。

厳しい顔になると、目が猛禽類のように鋭くなり、最初の印象よ

りずっと怖い顔になった。

「彼は、やってはいけないことをやってしまったんだよ」

「やってはいけないこと？」

「悪魔を召喚して、魂を売ってしまった」

ジン

藤村仁の家は麗華の学校から、数キロほど南にあった。

二階建ての、同じようなかつこうをした建売住宅が幾つか並んでいる、一番東の端で、二階の東側が仁の部屋だとフィリップは案内してくれた。

初めて入る仁の部屋だ。

付き合っていたはずなのに、初めてだ。

麗華に今心臓があるなら、さぞドキドキしていたことだろう。

同い年の男の子の部屋自体初めてだった。

だが、そんな気分もほんの一瞬だった。

フィリップの後に従って、屋根から直接仁の部屋に入る。

実体のない麗華とフィリップは、屋根も天井の板もまったく関係なく素通りできた。

六畳ほどのフローリングの部屋の中央に、仁がうつ伏せに倒れている姿は、麗華を一瞬フリーズさせた。

「ジン、ねえ、ジンってば……」

「むだだよ、もう死んでる」

「そんな……こんなに綺麗なのに、なんだか眠ってるみたいなの
に」

「そういう君だって、もう死んでるんだがね」

「そう……そう、だった」

フィリップにべもなくそう言われて、麗華も初めて自分の死を自覚すると、なんだか涙があふれてきた。

倒れている仁の下には、大きな紙に描かれた魔方陣のようなものが敷かれている。

仁はそれを覆い隠すように倒れたらしかった。

「いつたい、いつ死んだの？」

「麗華はしゃくり上げながら聞いた。」

「ついさつき、君が飛び降りたのと同じくらいかな、空が一度真っ暗になっただろ？」

「よく憶えてないけど……」

「あの時に、悪魔が蘇ったわけだ、正確には死んだのではなくて、魂を抜き取られたわけだが……」

「どうしてそんなことになったのよ？」

麗華が聞くとフィリップは麗華に掌を向け、

「急ごう、少しでも早い方がいい」とさえぎった。

体育会系特有のド派手な半パンのジャージとTシャツから出ている腕や首は、本来なら野球部にありがちな部分焼けで真っ黒のはずなのに、すでに蒼白になっていて、死後硬直が始まっていることを示していた。

フィリップは無造作に仁の下の魔方陣を引つ張り出すと、手品師のようにそれを一振りして燃やしてしまった。

「こんなのがあると、間違ってたまたま変なのを召よんでしまいかねないからね」

麗華を仁の隣に座らせ、なにやら口の中でもごもごとアラビア語だかヘブライ語だかの呪文をひとしきり呟き、最後に気合とともに「カーマハ・キマグレッツ！」と叫んだところで、麗華は気を失ってしまうのだった。

再び目を覚ました時には、麗華は仁の体に入っていて、相変わらず床の上うつ伏せに倒れている状態だった。

あれ？なにが起こったの？

「あ……う……」

なに？動けない

「動かない方がいいよ、少し体が冷えていたようだから、血が流れて温まるまで時間がかかりそうだ」

「え……？」

「説明するからそのままの状態で聞きなさい」

「あ……い……」

「今の時代の人間たちは、スポーツという体を動かす娯楽を楽しんでいるようだが、これは紀元前九世紀あたりのオリンピックの大祭に起源をみることができようかな、ともかく君のボーイフレンドはその中の野球というボールを使った種目をやっていたようだね」

「え？」

そ、そのレベルから説明するの？

「ん？ああ失礼、もっと噛み砕いて説明しようか」

フィリップはそう言って笑ったようだったが、うつ伏せの麗華に彼の顔は見えなかった。

ここで余談だが、仁に憑依した麗華をどちらの名前で呼ぶか、作者も正直さんざん悩んだのだが、以降は一応「麗華」で統一することにしよう。

「その野球というスポーツの高校生の大会が明後日、つまり七月十日から始まるらしいのだが、仁君は大会の直前にきてプレッシャーのあまり、悪魔に魂を売る契約を結んでしまったのだよ」

「えええっ？」

「すなわち『魂を売るから試合を全て勝たせてくれ』とでも契約したんじゃないかな」

いくら緊張してたからって、そんなマニアックなことしなくても……

「いやいや、彼はもともとカルト趣味があつたようだ……」

「うそでしょ？ジンにそんな趣味があるなんて！」

麗華は血相を変えて飛び起き、部屋の中を物色した。

「こらこら、いかな他人の部屋をそんなにひっかき回しては」

「いいの！あたしにはその権利くらいあるでしょ？これでも一応元カノなんだし、何日かジンに代わってあげるんだし、どっち道ここで何日か暮らすんだし……」

そうはいつでも。ごめんねジン

一度は彼氏と呼んだ間柄である。

さわやかな笑顔と、抜群のルックスで、誰にでも優しくかった仁の
タンスや机の引き出しを、疑いの目でいじくり回すのは、麗華にと
っても良心の呵責に堪えなかったのであった。
だが結果。

呪いの藁人形セット。

呪いの白魔術セット。

呪いのジプシー魔術セット。

「な、なんでこんなに『呪う』のが好きなのよ」
さすがに麗華が悲鳴をあげると、

「ずいぶんとディーブな趣味を持っていたようだね」

と、フィリップがまるで殺人事件の現場検証をしているベテラン
の刑事のように、無感動にこたえた。

おまけに。

ロリータ・S M趣味のエロ本多数、ロリータ・S M趣味のDVD多
数、ロリータ・S M趣味のブルーレイ多数。

なにもブルーレイで見なくなってる

「パソコンと携帯もみてみるかね？」

「も……もう、いい……」

パソコンと携帯ともなると、もっと「黒い」趣味が見つかりそう
だった。

き、きめえ。こいつきめえ

麗華は下半身の力が抜け、とうとう座り込んでしまうのだった。

「ま、まあ、『呪いのセット』はともかく、それ以外のオモチャ
だったら、今時の男はだいたいこんなもんだがね」

「そんなはずないわ、あんなさわやかだったジーンが、まさか……」
麗華の心の中で、「ドヨン」という音が響いた。

「人というのはわからないものだね」

フィリップがまるで他人事のように、DVDのケースをつまみ上
げ、亀甲縛りに縛られた少女の写真をあれこれ見ながら、「ところ
で」と続けた。

「話は本題に戻るが……大抵、人間の行う召喚などというのは大部分がお遊びで、なにも出てこないのが普通であるし、相当の修行を積んだ専門家がやったとしても、使い魔ていどの小者を呼び出すのが精一杯なんだが。仁君の場合、どんな方法で呼び出したかは知らんが、とんでもない大物の悪魔を呼び出してしまったようだ」

「どうしてそんなことわかるの？」

「小者の悪魔というやつは知能もそれなりで、召喚された後も、人間のいうなりになったり逆にエサにつられて騙されたりするものなんだ。だが強力なやつほど知能は高く、プライドも高いから、人間のいうことなどバカにして聞かないものだ。だから『魂を売る』などの契約など無視して、いきなり仁君の魂をさらって行ったんだよ」

「それで、さらってどうするの？」

「食べるわけだね、これが」

フィリップは真顔で麗華をじっと見て言った。

「そ、そんな」

麗華はさすがに体が震えた。

フィリップはさらに追い討ちをかけるように言った。

「食べる……つまり魂がなくなる、というわけだから、もう人間に転生することもできないということだ」

「あたしはどうしたらいいの？」

「君はそのまま仁君として、普通に生活していてくれればいい。」

仁君の魂は私を取り返してくるよ」

フィリップの話の聞いて麗華は「そんな」と、頼りなげにつぶやいた。

「『普通に生活する』っていわれても、ジンって本気で甲子園とかプロ野球目指してるピッチャーなのよ。しかも、もうすぐ夏の大会が始まるのよ、あたしはどうすればいいの、とてもジンみたいに投げられるはずないし、ちっとも『普通の生活』じゃないわ」

フィリップは麗華の肩に手を乗せて、じっと目を覗き込みながら

言った。

「かわいそうだが君の方は自分でなんとかしてもらうしかない、私の方だって、上級の悪魔と交渉するのは大仕事なんだよ……それに本来、これは君たちにとって大サービスなんだがね」

「大サービスって？」

「本当ならば、我々天使は自殺者や悪魔に魂を売った者に対しては干渉しないのが普通なんだよ、いちいち手を貸していたらきりがないからね。だが、今回のように大物の悪魔が人間の魂を喰って完全に目覚めてしまうのは霊界にとっても看過できない大事件なんだよ。だから君の大罪も帳消しにして、仁君の魂も救ってあげようというのだ」

「でも、それで相手の悪魔って、そんな簡単にジンの魂を返してくれるの？」

「いや、おそらく無理だろうね。対決する準備もしておかないと」「対決して、戦うの？大丈夫なのそんな歳で？」

フィリップは本気で気分を害したらしく「失敬な」と鋭く言い、「天使というのは神に仕える戦士でもあるんだよ、まだまだ私だって悪魔の一匹や二匹……」

とムキになった。

麗華は形だけうなずきながら、別のことを考えていた。

私はいつたい何日ジンと代わってればいいのよ

その時。

階下から仁を呼ぶ、母親の声が聞こえてくるのだった。

「仁、ごはんよ、早く降りていらっしやい」

麗華は驚きのあまり心臓が再び止まりそうになったが、かろうじて「はい」と返事をして、

「ジンのご両親は今回のことなにも知らないのかしら」と小声でフィリップに聞いた。

「お父さんは仕事だし、お母さんは夕飯の買い物に出かけてたほんのわずかの間のできことだったからね」

「でも、今日、練習はどうしたの？」

「仁君はよく練習をサボってたらしい」

「え？それ本当」

麗華にとつてはそれも初耳だったが、そんなことを気にしているヒマはなかった。

「あたしだつてバレないかしら？」

と、麗華は自分の体をながめ回しながら聞いた。

「バレるわけじゃないじゃん」

フィリップは少しイライラした感じで、取り合わなかった。

麗華はちよつとムツとして階段を降りて行った。

父と母

母親は不思議そうな顔で、麗華の顔をしげしげと見てから、階段の上を見上げ、

「誰か来てるの？」

と、聞いてきた。

「だ、誰も来てないわ……ないよ……」

「なにか話し声が聞こえたようだけど」

「え、英会話の勉強してたのよ」

母親は「えええっ」と目を丸くした。

「あんたが勉強だなんて、ちよつと熱でもあるんじゃない？」

そう言つて、麗華の額を触ってきた。

「だ、大丈夫よ……だよ」

「それに、あんたが私の呼ぶ声に返事をするなんて、小学生の時代以来じゃない、ホントに大丈夫なの？どっか悪いんじゃないの？」

「えっ？そうだったの？」

しまった、早くもピンチ

「だ、だからさ、最後の大会ももうすぐでしょ？なんだから、今までの緊張がほぐれて、すつきりしちゃってさ」

すると母親は、「そ、そうなの」と言葉を選ぶように、

「そ、そうね、あんた今まで頑張ってきたもんね、やるべきことは全てやったんだから、そうよ、全てやったのよ」

と、なぜかきこちなく『やった』という言葉を強調した。

だって、この時間にジンが家にいるってことは、練習に出ないのバレバレじゃん、返事のことなんかより、なんでそっちの方を聞いてこないんだらう？

麗華は首を捻ったが、キッチンに入った瞬間、それどころではなくなつた。

うわっ！肉の焼ける臭い

麗華は肉が大嫌いだったのだ。

肉の焼ける臭いを嗅いだだけで胃のあたりがむかむかしたが、今度は仁の父親が視界に入ったので、とりあえず平静を装った。

お世辞にも広いとは言えないキッチンに置かれたテーブルの向こうで、父親は新聞で顔を隠すように椅子に座っていた。

挨拶をしようと覗き込んだが、なかなかこつちを向いてくれない。麗華は仕方なく椅子に腰掛け、さりげなく観察していると、時々チラと麗華の方を覗き見ているようだったので、「おかえりなさい」と挨拶してみた。

すると父親は芸人がコントでコケるみたいに、椅子からガタンと落ちそうになり、怯えたような目を麗華に向けるのだった。掛けていたメガネが、斜めにズレて落ちている。

「え？ああ……た、ただいま……あは、あははは……」

とつてつめたような大きな笑い声がせまいキッチンに響き渡り、それが返ってその後の沈黙を余計に気まづくさせるのだった。

時間にして一分くらいだったのだろうが、かなり長い沈黙に感じられた。

その間父親は終始落ち着かない様子で、そわそわし、自分に弾みをつけるように、コップのビールを一口グイッと呑み、「調子はどうだ？」と、上目づかいに身を乗り出してきた。

「え？うん、まあまあ、かな」

すると父親は、また一瞬戸惑ったような顔をしたが、すぐに、いかにも嬉しそうに、

「そうか、まあまあか、ははは……そうかそうか」

と、ただの『まあまあ』をまるで思いがけない吉報を聞いたみたいに大喜びした。

なんなのよ、この腫れ物に触るような雰囲気は

『まあまあ』がそんなに嬉しいはずはない。

この父親は仁が会話に乗ってきたことが嬉しくて仕方がないんだらうと麗華は理解した。

それは、麗華にも心当たりがあった。
仁とまだ付き合い始めたばかりのころだ。

初めて彼氏ができたことが嬉しくて仕方ないのに、なにを話したらいいのかわからない。

仁のことを大事に思えば思うほど、彼をどう扱ったらいいのかわからない。

「こんなことを言ったら怒らせてしまうんじゃないか」などと余計な心配をしまい。

結局、どうでもいいようなことに食いついて、笑うところじゃないのにわざとらしく

はしゃいでみせたりするあの感じだ。

「あらあら、お話が弾んでるのね、はい、今日は奮発してステークよ」

弾んでるか？このぎくしゃくした会話が

母親の、取ってつけたような言い方と、不自然にトーンの高すぎる明るい声に、麗華は思わず失笑しそうになった。

だが。

この家って、いったいいつもはどんな雰囲気ですぐ夕飯食べてるのかしら？

何日も散歩をさせていなかった犬を久しぶりに連れ出したら、こんな感じで些細なことに大はしゃぎするのではないか。

そんな風に考えると、この不器用で優しい夫婦がひどく憐れに思え、なんだか涙が出そうになってくるのだった。

でも、無理、ステークは、無理

麗華はとりわけ牛肉が大嫌いだったのだ。

特にレアの、半生の、あの乳臭い臭いが苦手だった。

「明後日から大会だからな、母さん、今日と明日は奮発するって。今日がステークで、明日がカツレツ……『テキにカツ』、なんちゃってな、あはははは」

父親が、顔をくしゃくしゃにして笑った。

なんか、いい人たちじゃん……あたしん家なんか……

大手銀行員の父親と、経営コンサルタントの母親。

父親は大阪の支店に単身赴任中だし。

母親は主に地方の旅館の、経営アドバイザーとしてあちこち飛び回っているため、今は二人ともほとんど家にいない。

プライドが高く、エリート意識むきだしの二人。

夫婦というより、お互いライバルみたいな二人。

おかげでお金に困ることはなかったが、麗華は高校に入ってから、ほとんど一人暮らしだった。

キッチンはこの家よりずっと広がったが、食事はその無駄に広いキッチンで、四人掛けのテーブルで一人、コンビニの弁当を無言でつつく毎日だった。

父親は大阪に愛人がいるらしいのだが、母親は全く気にしていないようだ。

たまに家族三人がそろった時には、高給レストランで食事をするのだが、両親の携帯に代わりばんこに電話がかかってきて、退席する時に「失礼」と言う以外は、ほとんど誰も喋らない。

今日の麗華の自殺でも、すぐに帰って来るかどうかさえわからない二人である。

形はともかく、こんな賑やかな食事は、何年ぶりだろう。だが。

ステーキだけは、ちょっと……

幸いなことに、汁物は洋風のスープではなくワカメの味噌汁で、ワカメはごはんのおかずになった。

キュウリとナスの浅漬けもちょうど旬で美味しかったので、そっちはかり食べていると、

「どうしたの？好きなお肉食べないで」

と、案の定というか、母親が心配そうに聞いてきた。

「いや、あの、別に、ちょっとダイエットしようと思って……」

「そんなんで大丈夫か？試合はあさってなんだから、力つけなきゃ。」

あさつてに向けて肉を漁って、なんてな」

父親は完全に上機嫌で、ビールで真っ赤な顔になっている。

「うん、は、はい……」

『テキにカツ』もお父さんのアイディアだったのね、どうでもいいけど

麗華は赤身の所を選び、ナイフで一切れ、できるだけ小さく切って、息を止めて（ついでに鼻もつまみたかったが）極力噛まずにそれを呑み下した。

「ふう……つつぷ」

やった、食べれた

母親は本当に奮発したようで、肉が高級品だったのが嬉しい、ほとんど噛まずに飲み込めたのだった。

ふと我に返って回りをみると、父と母の視線とぶつかった。

二人ともなぜかひどく不安げな顔をしていたが、目が合うと、嬉しそうに微笑むのだった。

「美味いだろ？」

と父親は言った。

「う、うん」

この勢いを駆つてもう一切れ。

こんなに喜ばれるなら、食べないわけにもいかない。

こんどは少し大きめに　　と言つても普通サイズくらいに　　切つてみた。

大嫌いではあるが、決して肉アレルギーというわけではないのだが。

「ぐへえ、うげえ……」

ちよつと調子に乗りすぎた。

噛まずに呑み込むには肉が大きすぎて、むせたのである。

血相を変えて、シンクに駆け寄り咳き込む。

おかげで返って、口、喉、鼻の粘膜が全て肉の臭いで満たされ、しかもヒリヒリする。

「大丈夫？」

母親が悲鳴のような声をあげて背中をさすってくれる。

「だ、大丈夫……」

「あんたやっぱり、病院で診てもらった方がいいわ、あんなに大好きなお肉でもどすなんて」

「ほんとに大丈夫……」

ちよつとしつこい、でも……

この感覚。

嫌じゃない。

これは、遠く離れた所に住んでいる祖父や祖母の家に久しぶりに行った時の感覚に似ていた。

このぎこちなさ。

このいささか見当違いな深情け。

そしてこの、あふれるばかりの愛情。

それにしても。

ジンのドアホウ、普段いったいどんだけ親に気を遣わせてんだ

よ

胡桃美琉久ファーストバトル

おなかすいた

お昼休みのチャイムが鳴り、麗華は弁当箱を開けて溜息をついた。おかずの所には巨大なハンバーグが鎮座している。

麗華にとってそれはまさに、愛情と言う名の魔物が凝結したような肉塊であった。

ま、またお肉……

朝食は卵焼きだったので、昨夜の分までお腹いっぱい食べることができた。

それにしても、男の子の体って、どうしてこう、お腹がすくのよ

休み時間は、念のためにコンビニで買ってきたサンドイッチやおにぎりでのぐことができた。

だが、そもそもそれらは母親が朝、ハンバーグを焼いているのを見て、お昼に弁代わりに食べるつもりで買ったのだが、仁の体の食欲は、麗華の想像をはるかに超えていた。

休み時間の度に押し寄せる底なしの空腹にそれらは一つ減り二つなくなり、ついに全て食べつくしてしまっただにも関わらず。

お昼休みの仁の体のエネルギーは、ほとんどゼロに近かった。ど、どうしよう

麗華が途方に暮れていたその時。

教室の戸が開いて、胡桃美琉久が入ってくるのだった。

「こんにちは、ジン」

ミ、ミルク……このアマ、なんでここにくるのよ

胡桃美琉久。

麗華の恋のライバルにして、自殺に追い込んだ最大の張本人。

中学時代から同学年の意地悪グループと徒党を組み、陰ながら麗華に嫌がらせをし続けた、少女の皮を被ったケダモノ。

いつも裏から手を回すような卑劣なやり方をするため、証拠はなかったが、麗華のカバンにヘビを入れたり、日記帳を盗んで学校の掲示板に貼り付けたりなど、その卑劣で手の込んだやり口は、こいつ以外に考えられなかった。

それでも、中学時代まではまだ悪戯ていどだったが。

最近では、出会い系サイトに麗華のパンチラ写真と携帯番号を載せるなど、その嫌がらせはシャレにならないものになっていたのだ。

「はい、今日のお弁当」

「今日の、って……」

ジンのドアホウ、毎日このメスブタにお弁当もらってたってえの？しかも、こいつまでジンって呼んでるし……

「あんだ、学校抜け出してきたの？」

麗華は怒りを押し殺しながら聞いた。

「いやだんもお、いつものことじゃない」

美琉久は女子と喋る時よりもずっと高いトーンの声で話しながら、麗華の背中をさわさわと触ってきた。

麗華は鳥肌が立つ思いだった。

麗華と美琉久は、仁とは別の学校に通っていたのだ。

仁の学校から二キロほど東にある、聖ポール・モーリア学園というお嬢様学校である。

美琉久は突如、なにかの発作のようにしゃくり上げ、ハンカチで目を押さえながら、

「それがねえ、ジンも聞いたでしょお、昨日麗華ちゃんが屋上から飛び降りちゃって、学校中大騒ぎなのよ……あそこにいると麗華ちゃんとの楽しい思い出をいっぱいいっぱい、思い出しちゃうし、なんかいられなくて……エーン」

と泣いたが、涙は出ていなかった。

ま、まあ大騒ぎにはなってるでしょうね。つつつか、なにが麗華ちゃんよ……

確かにこちらの学校でも朝から緊急朝礼とホームルームが開かれ、

ちよつとした騒ぎにはなっていた。

麗華にとつては不思議な気分だったが、本人としてはなんだかもう遠い昔の話のようで、すでになんとなく、他人事のようにも思えているのだった。

「ジンも、早く元気出して……そうよ、いつまでもクヨクヨしてたつてはじまらないわ、せめて生きている私たちだけでも仲良くやっていきましょう」

美琉久は唐突に窓の外の雲を見上げ、力強くまくしたてた。

この、偽善者め

だが。

「ほうら、今日は特製フォアグラ弁当よ、美味しいわよ」

フォア……グラ?……ゴクリ

フォアグラだけではなかった。

弁当の中身はまるで食の宝石箱のように、あらゆる贅が敷き詰められている。

背に腹は代えられない、か……でも、なんという屈辱、つつつか、美味しい、でも、くやしい

「相変わらずいい気なもんだな、おい」

麗華が『特製フォアグラ弁当』をほおばりながら、見上げると。

一人の男子生徒が麗華の机の横に立って、怖い顔でこちらを見下ろしていた。

上背はそれほどないが、制服のワイシャツの上からでも、筋肉隆々なのがわかる。

鎮西八郎……

仁と同じ、沢谷香高校野球部員の一人で、仁と同じクラス。

夕べ食事が終わって部屋に戻ってみると、フィリップはすでにいなくなっていて、机の上に野球部のスターティングメンバー全員の顔写真と、大まかな性格が書かれた名簿が置いてあったのだ。

『鎮西八郎、通称ハチロー。チームの中でも最も野球を愛している、ハードトレーニング信者で、やる気のない人間が大嫌い。ゆえにチ

「ムメイトの中では、仁のことを最も嫌っている」と、書いてあった。

「てめえ、きのうも休みやがって……こんな土壇場にきていったいどういうつもりなんだよ」

角ばった頬が横に張り出し、太い眉毛と共に、いかにも強情そうな顔を形作っている。

「ご、ごめんなさい、ちょっと熱があったから」

「ご、こわ……つつつか、なんであたしが怒られなきゃなんないのよ」

「俺は三十九度の熱が出た日も練習はやったぞ」

そんなのあなたの勝手じゃん

元々鬼のような顔が、恐ろしく強い眼光で麗華を見下ろし、それは普通の女の子ではとても我慢できない恐さだった。

つまり普通の女の子である麗華は「だ、だからごめんって……」とつぶやきながら涙が出てきてしまうのだった。

「て、てめえ、なんで泣いてやがんだ、男のくせに」

「だ、だって……」

これは八郎にとって、かなり想定外だったようで、でかい毛虫のような眉尻が八郎の名前の八の字のように下がるのだった。

「ちよつと、いい加減にしなさいよ」

そこへ美琉久がものすごい剣幕で、八郎に咬みついた。

こんな時の美琉久の性格の悪さは、頼もしかった。

「あんたみたいなの他大勢の雑魚とわたしのジンとは、もともと持つてる才能が違うのよ、雑魚は一人で壁でも相手にボール投げたりやいいの」

わ、わたしのジン？

「ご、このアマ」

八郎は美琉久をにらんだが、美琉久はまったくひるまない。

「そんな狛犬みたいな顔で、つきつきりでグズグズ言われたんじゃ、せつかくのフオアグラが不味くなるわ、もう、気がすんだでしょ？」

あっち行け、シッシッ」

八郎は大きく舌打ちしたが、日頃からよほど美琉久にやり込められているらしく、それ以上逆らおうとはせず麗華をにらんで、

「とにかく、これで明日の本番で無様なことやりやがったら承知しねえからな」

と捨て台詞を吐いて、去って行くのだった。

「ああいやだ、練習なんて凡人が集まってやってりやいいのよ」

美琉久は容赦せず、その背中にぶつけるように叫ぶのだった。

その八郎の背中とすれ違いざまに八郎の肩を叩いて、彼より頭一つ分も背の高い、真っ黒な顔の男子がにこにこ笑いながら近づいてきた。

高橋エンリケ・マコト

『ブラジル系のクォーターで、バカ力がある。性格はラテン系で陽気すぎるくらい明るく、わが道を行くから仁のことも全然気にしてないらしい、短所は女好きなところ』

フィリップの名簿にはそう書いてあった。

つまり、良くも悪くも、頭の中からっぽ、ということか。

「ウイース、またきてるね別嬪さん」

エンリケはくるなり美琉久の肩を抱いてにこにこ笑った。

わざわざ近づいてきた目的は、これなんだろうと麗華は思った。

「こんにちはマコちゃん」

美琉久は満面の笑顔とは裏腹に、その腕を振りほどく。

「心配してたんだよミルクちゃん、きのう君の学校で変な事件があっただろ？」

変な事件って……人ごとだと思って

たしかに、この学校の連中からしてみれば、人ごとと言えば人ごとである。

「だから今日はミルクちゃん、こないんじゃないかと思って」

そっちの心配かよ

「確かに悲しい事件だったけど、でも……」

美琉久は、一瞬で泣きそうな顔をしたかと思うと、

「ジンの試合はもう明日なんだし、なんだかじっとしていられなくて」

と次の瞬間にはきりりと表情を引き締めた。

まるで美琉久の方が悲劇のヒロインのようである。

その三文芝居を見ていて、麗華はひどくやるせない怒りがこみ上げてきた。

自分の死に対してこれ以上の侮辱はなかった。

まだ面白可笑しく茶化してくれた方がマシである。

「じゃあ、試合が終わったらもうきてくれないのかい？」

エンリケの指先が、美琉久の前髪を優しくかき上げる。

「まさか、くるに決まってるでしょう」

美琉久の憂いを帯びた眼差しが、長身のエンリケを見上げた。

美男美女同士、確かに絵になるのだが。

こいつら、なにやってんのよ、人の食事中に、つつつかミルクはジンに用事があったんじゃないかねえのかよ

県立沢谷香高校野球部 その1（前書き）

すみません。

前話で間違いがありました。

「あさつての試合」という意味の言葉が二回出てきますが、試合は「明日」です。

他、気がついた誤字も訂正しました。

県立沢谷香高校野球部 その1

はあ……

二、三步歩く毎にため息が出た。

麗華はそれでも、亀のように遅い足を部室に向けて歩くのだった。

冗談じゃないわ

八郎は『最も仁を嫌っている』と、フィリップの名簿には書いてあった。

つまり、あの怒りようはやや極端な例外と考えていいのだろうか。

だが、あれがチームメイトたちの正直な気持ちの代弁なのだろう。

もしも野球部の三年生全員が、あんな風に自分を責め立ててきたらどうしようか。

逃げよう、その場で

麗華はあっさりと、そう割り切った。

もともと仁とはただ単に「元カレ・元カノ」というだけの間柄なのである。

しかも「つき合っている」などというのは形の上だけで、野球で忙しかつた仁とはなに一つ彼氏・彼女らしいことなどしてきてはいないのだ。

中二の時の修学旅行の際、告白されたというだけで、ほとんどデートらしいこともしなかった。

わざわざ麗華が仁の野球の練習が終わるまで待っていて、ただ家まで一緒に帰る、というていどの「彼女」だったのだ。

いや、そもそも「野球で忙しい」などというのも、あの美琉久の調子づきようを見ていると怪しいものだ。

どうせ自分も、大勢の中の一人にすぎなかったのだろう。考えているうちに、だんだん腹が立ってきた。

下手に形式だけ「告白」などされたものだから、返って他の女子たちの嫉妬を買い、イジメの標的にされた分、とんでもない貧乏くじ

を引いただけではないか。

高校に入ったらもつとつき合いは遠のいた。

チームメイトのキャッチャーのヤツが、麗華が仁に近づくことを公然と邪魔をし始めたのである。

「三年の夏の大会が終わるまで、野球部員は女人禁制だ」

というのがヤツの言い分だった。

一応もつとも言えばもつともな理屈だが、ただでさえモテモテで、近づく女の子たちがウジ、ボウフラのごとく後から後から湧いて出てくる「彼氏」と口をきくことすら禁じられたら、それは最早「彼女」とは言えなかった。

こうして麗華は、彼女としての実権を剥奪された拳句、そのくせ名目だけの思われ人として、仁のファンどもから嫉妬の的にだけはされるという、人身御供になりさがったのだった。

悩みぬいた拳句、思い切つて別れ話を持ちかけた時。

仁は「えっ？」と目を丸くした。

「俺、他に彼女つくる気ないし、気が変わったらまた付き合ってくれないかな」

そう言ってくれた。

ちよつと救われた感じがした。

だが。

今思えば、妙にあっさりしすぎてしまった。

実のところ、あの時の仁がどんな顔でそう言ったのかは思い出せない。

というより、涙で霞んで見えなかったのである。

でも、それにしても

この男（仁）がここまで腐っていたとは。

麗華は歩きながら、悔しさのあまり奥歯をギリギリと鳴らした。

女の子にはあんなに優しくした仁に、こんなとんでもない裏の顔があったとは。

あの、異様な「呪いのセット」といい、高校生とは思えない歪んだ

フェティシズムのはけ口といい。
男社会での嫌われっぷりといい。

人間のクズじゃない

こんな男のために自分は死んだのか。

そう思うと、情けなくなってくるのだった。

麗華の自殺の原因は一つではなかった。

一つには、子供に無関心な自分の両親への無言の抗議。

もう一つは、美琉久一味の執拗な嫌がらせに対する、間接的な復習。
そして、麗華が仁に近づくことを禁じた、仁のキャッチャー大江戸
大鉄への当てつけ。

だが、最大の動機は。

自分が死んで身を引くことで、輝かしい未来が待っているであろう
仁を自由にしてあげよう、という、美しい大儀ためだったのだ。

ほんとうの愛というのは、貰うものでも奪うものでもない。「
与える」ものなのよ

それは『愛のために死を選ぶ』という究極の美学だった。

それは麗華の、美琉久や大鉄や、そして仁本人に対する最後の矜持
だった。

そしてそれは、愛に殉じる女神のような、広く深い母性だった
というか、麗華も確かに自分で自分に酔い痴れる悪い癖があるのだ
ろうが。

ともあれ、今となっては、それらは全て無意味だった。

完全に犬死だ。

結果、あの美琉久を余計に調子に乗せ、仁という天才投手の仮面を
被った変態を、今まで以上に放埒に野に放っただけではないか。

その上自分がなぜ、この期に及んでこのバカ男に成り代わって汚れ
役をやらなければならぬのか。

やっぱり逃げよう、まだ霊界で木になった方がましよ

「自殺にしては、やや安易な動機だが……」

フィリップの皮肉を込めた嘲笑が、頭をよぎる。

確かに他人から見れば安易だったのかも知れない。

だが、今でも死んだこと自体は後悔していない。

ここまで変人やゴミクズみたいな人間に囲まれたら、誰だって一度や二度は本気で死ぬことを考えるだろう。

はあ……

麗華はまた、ため息をついた。

最大の問題は、自分が「霊界の法に触れる」などと、思いも寄らない地雷を踏んでしまったことだ。

さつさとジンの魂を連れてきてよ

麗華は頭の中のフィリップをにらみつけて抗議した。

だいたいあたしは仁としてただ「生きて」「いればいいんだし、野球なんてする必要ないじゃん、仁だってギリギリになって悪魔にすぎりつくくらいだったら、普段からもっと練習しろってのよ。そうよあたしには関係ないじゃん
やっぱりヤバくなったら逃げよう。

そう考えると、少しは気持ちが悪くなった。

ふと、校舎脇の角の所で一度足を止め、建物の陰から部室を窺う。

先ほどから、ゆっくり歩いていたのには理由があった。

昨日まで女の子だった麗華にとって、洞窟のように薄暗い部室で、他の部員と一緒に着替えるのが恥ずかしく、できるだけ時間をずらすとわざと遅れてきたのだ。

二十メートルほど先にある部室からは、蜂の巣箱から飛び立つ働き蜂のように後から後から、思春期の男たちが吐き出されて行った。

そろそろいいかな

恐る恐る入って行くと、まだ中に二人いた。

「こ……こんには……」

麗華が挨拶をすると、二人とも弾かれたように「気をつけ」の姿勢になり「こっ、こんちわーっす」と声を裏返して最敬礼をした。

二人ともフィリップの名簿にも載っていなかったし、様子からして、恐らく下級生なのだろう。

鬼気迫る勢いで、素早く着替えを済ませ、

「お先に失礼します」

と、大慌てで飛び出して行った。

なるほど、下級生からはずいぶんと恐れられているみたいね

今さら驚くことではなかった。

だが、次の瞬間、ドアが勢い良く開き、こんどは麗華が弾かれたようになっちゃった。

「こんにちは」

麗華が挨拶をすると、相手はいかにも怪訝そうに麗華の顔を覗き込んできた。

しまった、この人誰だっけ、名前忘れちゃった

「なんだよお前、女の子みたいな挨拶して」

彼はそう言うのと声をあげて笑ったのだが、その空々しい空笑いはいかにも不自然で、目も笑っていないかった。

その上彼は、湿気を帯びたような目で息を弾ませ近寄ってきたのである。

「おいおい、男どうしてなに恥ずかしがってんだよ」

と、麗華の肩に手を置き、顔を近づけてくる。

思い出した、遠藤盛遠って子だ

遠藤盛遠。

『人知れずゲイであることを悩んでいるが、卒業を前にして、そろそろ本人はそのことをカミングアウトするきっかけを狙っている。』

本人は真剣なだけに、ある意味最も要注意』

「……」

どうしてあたしってこう、運が悪いんだろう

麗華は、思わず身をよじって、肩に触れる生温かい手から逃れた。すると。

「な、なんだよお前、ナヨナヨして、ははは、変なヤツだな、ははは」

と、逆に遠藤の方が妙に緊張している感じだった。

「やばい、このシチュエーションは、やばいだが。」

しまった、ユニフォームの着かたがわからない

そもそも野球のユニフォームというのは、他の競技のジャージとは全く違い、門外漢にとってはひどく面倒なものなのだ。

仕方なく遠藤が着替えるのを、そつと盗み見ると。

「な、なに見てるんだよ、お前」

遠藤もそつと、こちらを見ていた。

県立沢谷香高校野球部 その2

グラウンドではすでに、ほとんどの部員が各々練習前のストレッチやキャッチボールをして体をほぐしていた。

「いよつ、休日の翌日は社長出勤かい？」

八郎とキャッチボールをしている小柄な男が、口の端で笑いながら声をかけてくる。

皮肉屋の牛若小次郎という男だ。

小次郎の声につられて八郎が振り返るが、目の端で一にらみしただけでなにも言わず、すぐに前を向いてしまった。

他の三年生は、こちらを見向きもしなかった。

下級生は大声で挨拶して、最敬礼をしてくるが皆一様に麗華と目を合わそうとせず、こちらが声をかける前にできるだけ遠くに逃げようとはかりに離れて行くのだった。

「熱が出たんだって？」

急に後ろから声をかけられ、驚いて振り向くと、そこにはあの、大江戸大鉄が立っていた。

「え……？」

大江戸大鉄。

沢谷香高校野球部のキャッチャーにして主将、そして仁と麗華を引き裂いた、直接の張本人だ。

「大丈夫なのか？」

切れ長に釣りあがった目が、心配そうに麗華を覗き込んでそう聞いてきた。

この目、大嫌い

「え？ああ、うん」

お願いだから、あんなだけは話しかけてこないで

麗華としてはこれ以上チームメイトから嫌われたくなかったが、この大鉄だけは別だった。

あまりにも大嫌いだったので、フィリップの名簿のプロフィールも読む気になれなかつたくらいだ。

「ランニング、できるか？」

「ええっ？」

だから、熱があるって言ってるでしょう

どうせ仮病で休んだことくらいはバレているのだろうが、どちらにせよこの男と行動を共にする気にはなれなかつた。

すると大鉄は麗華の耳に顔を寄せてきて、「きのう彼女、自殺したんだってな」

と耳打ちをした。

麗華は少し驚いて「えっ？」と大鉄の顔を見た。

「それで練習休んだんだろ？きのうは」

大鉄は神妙な顔で、真っ直ぐ麗華の目を見て言った。

ふうん……この男でもこんな顔するんだ

麗華は、何度か大鉄と直接話したことがあった。

高校一年の秋のころだったと思うが、「もう仁には近づかないでくれ」と言った時の大鉄の顔は無機的で、まるで石でできているのかと思うほど人間性が感じられなかつたものだ。

そんな野球ロボットのような男に、こんな悲しげな顔をする感情があることに麗華は少し驚いたが。

「あなたには関係ないでしょ」

と、突き放した。

大鉄は首の後ろを手で揉みながら、

「ちよつと走りながら話そうか」

と虚ろな目で誘ってきた。

嫌よ、あなたと話すことなんかないわ

そう喉もとまで出かかったが、麗華は渋々後をついて走った。

このチームメイトの雰囲気の中に、一人でいるのも嫌だったのだ。しばらく二人で無言のまま、ゆっくりとグラウンドを回った。

「俺もやりすぎたと思ってる、反省してるよ」

大鉄が空を見上げながら、独り言のように言った。

反省するくらいなら、最初からするなよ、女人禁制なんて時代錯誤もいいとこだわ

「お前の生活の荒れ方が、あまりにもひどかったから……」

そ、それは解る、大いに解る

「でも、かわいそうだったな、あの姫野って子」

「かわいそう？」

ほんとにそう思ってたの？

「あの子だけは、他の子たちと違ってほんとに真剣だったみたいだからな、だから余計に俺もきつい言い方をしちまった」

大鉄の絞り出すような声には、確かにこの男なりの誠意がこもっていることは麗華にもわかった。

だが中途半端な同情は逆に麗華の神経を尖らせるのだった。

「そう、確かにかわいそうだった」

麗華の心から無数に突き出ていた棘が、一斉にゆっくりと蠢きだした。

今までそれらは両親や美琉久にも向けられていたものだったが、大鉄に向いている棘に吸収され、大きくなって、巨大な一本の槍のようになつていく。

麗華はそれで大鉄を一突きしてやりたい衝動に駆られるのだった。

「あんたが殺したようなもんだよ」

無意識のうちにそんな言葉が口をついて出ているのだった。

さすがに大鉄も堪えたのか、一度立ち止まってしまった。

だが麗華がそのまま走り続けたので、後を追ってくるのだった。

「恨むなら恨んでくれていいさ……いくらでも恨んでくれ」

「恨むよ」

今さらなんだというのだ。

「でもな、誰かが鬼にならなくちゃ、野球部なんて集団はまとまらねえんだよ、すぐにバラバラになっちまうんだ」

言いながら大鉄の目は力を取り戻し、輝いてくる。

「だからなんだってのよ？」

「俺は主将として無理やりでもそれをまとめなくちゃならなかったんだ……そうやってこの三年間、俺もみんなも死に物狂いでやってきた、お前にとっては遊び半分だったかもしれないけど、みんなお前がいれば甲子園に出られると、本気で思っていたんだよ、みんなお前のワンマンチームと言われたくなかったから……」

「そんなこと、俺には関係ないわ、みんな自分のことばっか考えて……」

パパもママもミルクもあんたも、みんなしてあたしをこの世から追い出したんじゃない……みんなみんなって、野球部だってみんなあたしのこと嫌ってんじゃない

麗華は言っていて涙があふれてくるのだった。

「だからお前も自分のこと考えろよ、もっと本気で将来のこととか」「将来ってなに？」

「お前ならプロにだってなれるんだぞ」

「バツカじゃないの？所詮ボール遊びじゃないの、それが人の死よりも重いつての？」

死んだあたしには将来なんてないのよ

「おい、お前らなにやってんだ？」

突然後ろから怒鳴られて、二人は飛び上がって振り向いた。

そこには麗華たちと同じユニフォームを着て、薄い茶色のサンングラスをかけた体格のよい中年の男が立っていた。

「監督」

と大鉄が言った。

二人ともいつの間にか立ち止まって言い合いをしていたのだった。

「藤村、もう体は大丈夫なのか？」

監督はあきらかに、視線に侮蔑を込めてそう聞いてきた。

「は、はい」

麗華は秀困氣的にそう応えるしかなかった。

「今日は軽い練習でいい、三十球でいいからフォームを確認しながら

ら投げる」

と、大鉄にも目配せしながら言った。

結局こいつと組まされてんじゃん

バッテリーなのだから当たり前なのだが、麗華は渋々、ブルペンのマウンドに立ち、大鉄と向かい合った。

……たしか、こんな風にして投げてたのよねジンはふりかぶって。

足を上げて……。

あれ？どうしたんだろう、投げられない

「お前、なにやってんだ？」

大鉄が疲れ果てたような足取りで、駆け寄ってきて麗華をにらんだ。

「ふざけるのもいい加減にしろよ」

「ご、ごめん、まだ、体がだるくて」

なんであたしが謝ってんのよ

大鉄は大きくため息をついて、

「お前が腹を立てているのはよく解った、でもな、それと練習は別だろ？」

と、今度は哀願するような目で麗華を見てくる。

「え？だ、だから体の調子が……」

「そんなに練習したくねえなら今日はもういいから、たのむから明日は真剣に投げてくれよ、な？」

大鉄はそう言うつと麗華の返事を待たず「おおい、遠藤」と盛遠を呼んだ。

「お前も軽く投げとけよ」

遠藤は普段ライトを守っているが、リリースピッチャーでもあるのだった。

遠藤は何故か麗華に微笑みかけウィンクしてきた。

な、なに？

そして、ふりかぶって、投げた。

「ああ！」

わかった。

ウインクの意味ではない。

上げる足が反対だったんだ

ピッチングフォームになっていなかったのだ。

ウインクの意味も薄々解ったが、そっちは無視した。

ボーイ・ミーツ・ボーイ

きやあっ……

麗華が思わず悲鳴を上げそうになるその口を、フィリップは慌てて手でおさえた。

「どうしたのよ、その顔」

麗華は我に返り、部屋のドアを閉めてから声をひそめてそう聞いた。夕食が終わり、父親の予告どおりトンカツだった。二階に上がってきたところに彼が待っていたのだが、その顔。

たった今、大型トラックにでも轢かれたのかと思うほど、グシャグシャだった。

左の耳は削げ、その上の側頭部の頭皮も剥がれて、その頭皮は髪の毛が生えたまま、耳と一緒にぶら下がっている。

頭皮があつたはずの部分は骨が見えていて、しかも髪の毛は全体に火事場の中から這い出てきたかのように煤け、所々焼けて上に向かって突き立っていた。

右の頬は裂けていてそこから、口の中の奥歯が覗いて見えており。なぜか皮膚の裂けた肉の所はどこも出血しておらず、代わりに高熱で炙られたようにただれて痛々しげに外気にさらされていた。

「いやいや、交渉決裂だよ、これが」

フィリップは傷のことなどまるで気にしていないかのように、他人事のようにそう言った。

「大丈夫なの、そんな大怪我して？」

「少したてば治るよ」

麗華は救急箱を取りに戻ろうとしたが、フィリップは「大丈夫」と手を振った。

「やっぱりだめだったの？相手の悪魔」

「まあ、大方の予想どおり、ということとき、人間の方から魂を差し出すなんて、近代ではめつたにないことだからね、ヤツが簡単に手

放すなど考えられない、予想どおり激しい抵抗を受けてね」

「そんなに強いヤツだったの？そいつ」

「人間である君に名前は教えられないが、恐ろしく強力な一級の悪魔だった」

全ては今のフィリップの顔が物語っていた。

「じゃあ、あたしはまだこれからもジンでいなきゃなんないわけ？」

「すまんが、あと何日か引き受けてもらうことになるね」

麗華はさすがにフィリップが気の毒になる一方、仁の代役をした今日一日のことも思い出すと我慢できなくなり「もういいじゃん」と吐き捨てた。

「こんなドアホウ、もう放つときゃいいじゃん、どうせ自分から魂を売ったのはこいつなんだし、勝手にそいつに食べられちゃえばいいのよ」

「いやいや、そういうわけにもいかんよ」

フィリップはゆっくりと首を横に振った。

「悪魔が完全に復活してしまうのも確かに困るが。実は彼……仁君は、微力ではあるがこの町の運命を握っていてね」

「それってどういうことよ」

「君には協力してもらっているから特別に教えるのだが。この夏、仁君の高校は野球の全国大会で、ちよつとした旋風を巻き起こすことになっていったんだ」

「でも、それって、フィリップさんにとってはどっちでもいい話なんじゃないの？」

「私はこの町が好きでね。四十年前も前まで、このあたりは本当にいい所だったんだよ。川の水は人が泳げるほど綺麗で、みんなその川で洗濯をしたりしてね。人々はみんな元気で、一生懸命畑で働いて、秋には祭のお囃子が鳴り渡っていたものだった」

「そんな所だったの？」

それは麗華の記憶には全くない風景だった。

麗華が生まれたころにはすでに、この町はほとんどアスファルトと

コンクリートで固められていたのだ。

しかもこの数年、その上辺だけが近代的な田舎町は、中心部ですらシャッター街となっていたのである。

「今年の夏の野球大会をきっかけに、この町が少しでも元気になってくれれば、と思ったんだがね」

「それじゃあ余計にあたしなんかじゃ無理よ、野球なんて素人なんだし」

麗華がそう訴えるとフィリップは麗華のカバンを指差して、

「そう言いながら君も、結構やる気じゃないかね？」

と、本人は笑ったつもりなのか、傷だらけの顔を歪めて見せた。

カバンの中には、学校の帰りに途中の書店で買った、野球入門の本が入っているのだった。

「今日の練習も逃げずに出たようだが」

「だって、ジンのお父さんとお母さんを悲しませたくないから……」

麗華は口を尖らせて呟いた。

麗華にとっては返って頭の痛いところだった。

最早この世に未練など微塵もないはずの麗華だったが、あの優しい両親にだけは特別に後ろ髪を引かれる思いを抱きはじめていたのである。

「でも、止められるなら今すぐにも止めたいわよ、いったいいつになったらジンの魂を取り返せるのよ？」

「霊界では専門の交渉人を立てることにした、もう少しの辛抱だよ」

「そんな悠長なこと言ってて大丈夫なの？今こうしている間にも食べられちゃうんじゃないの、ジンの魂」

「それは問題ないね、ヤツらにはヤツらなりの儀式めいた決まり事があつてね」

フィリップはそこまで言ってから、「おや？」と床を見下ろした。

「お友達がきたようだ」

「お友達？」

「私もそろそろ戻るとするか」

ちよつと待つて、まだ聞きたいことが……

麗華がフィリップの背中に向かって叫ぼうとした瞬間、母親が階段の下から呼ぶ声が聞こえた。

お友達つて、誰よ？

麗華が少しいらいらしながら降りて行くと、そこには遠藤が立っていた。

「こ……こんばんは」

なにしにきたんだろう

麗華は戸惑った。

意外といえば意外だし、明日の試合に備えてチームメイトが訪ねてくるのは、当たり前といえば当たり前とも言える。

だが、最大の問題はそんなことではない。

彼はゲイなのだ。

それも、カミングアウトするキツカケを狙っている、最も危険な男なのだ。

二人きりになったら、急に襲ってきたりして

昼間のあの、意味深なウインクもなにかの伏線がありそうだ。

そもそも仁と遠藤つて、どんな関係だったんだろう。そんなに仲が良かったのだろうか。

ほんの一瞬の間にあれこれ考えてみたが、結局相手の出方を伺うしかなさそうだった。

「あのさ、お前が調子いい時のDVD持ってきたんだけど」

一瞬の沈黙が気まずかったのか、遠藤の方から先にそう切り出してきた。

「お前、今日なんだか調子悪そうだったからさ」

「ああ、ありがとう」

それは麗華にとっては本当にありがたい話だった。

それだけならとってもありがたいんだけど本当にそれだけ？

だが、そこまでしてくれている相手を帰してしまっわけにもいかない。

「まあ、上がったら？」

麗華は恐る恐る誘ってみるのだった。

「……ほら、ここで一度軸足にタメを作ってるだろ？そこから、体を開かないようにしながら一気に腕を振って……」

「なるほど、そうするわけね」

麗華の警戒心を完全に裏切るように、遠藤の解説は的確で親切だった。

だが、ここで新たな疑問も湧いてきた。

でも、どうしてこんなに親切に教えてくれるのかしら？

同じチームメイトとはいえ、エースの座を狙うピッチャー同士として、二人はライバルでもあるはずだ。

エースである麗華（仁）の不調は、第二投手の遠藤にとってむしろチャンスのはずなのだ。

「あのさ、話は変わるんだけど……」

遠藤は一通りレクチャーが終わると、言い難そうに話題を変えてくるのだった。

「お前さ、今日、妙に、その、なんというか、女の子っぽいというか、その、可愛かったじゃん？」

やばい、やっぱりそうきたか

「そ、そお？」

「うん、昨日までと全然違ったよ」

「そんなに変わんないと思うけどなあ」

麗華はごまかしながら、頭の中をフル回転させて考えていた。会話を緊迫感こそ全くないが、これは絶体絶命なのだ。

「お前、なにか隠してないか？みんなに」

「そ、そんなこと、ない、よ」

「昨日までの嫌われキャラも、本当は演技だったのかな、なんて本当の仁ではないことを見破られたか。あるいは自分もゲイであることを隠している、などと誤解されたか。」

遠藤は真っ青な顔になり、頬を震わせてためらっていたが、意を決したように、

「俺は演技してたよ」

と話はじめるのだった。

「俺、実は今まで、みんなに内緒にしていたことがあって……」

それは知ってる、知ってるから言わなくていいから、お願いだから襲ってきたりしないで……つつつか、待てよ

「ちょっと待って。やっぱりあるわ、隠してたのよ」

麗華の頭に一瞬間いたものがあつた。

もしかして、この子だったら、というかこの子だからこそ解つてくれるかも

「や、やっぱり？」

遠藤は気の毒になるくらい顔を輝かせ、笑つた。

信じてくれようがくれまいが、もう、知つたこつちゃないわ

麗華は「誰にも言わないでね」と念を押した後、自分が本当は麗華という女子高生であること、自殺してからの今までのこと、そして生前の仁との関係も含め、全て打ち明けてみるのだった。

考えてみれば、これは麗華にとって、いくつものメリットが期待できる反面、マイナスになることは一つもないのだ。

例えば遠藤が信じてくれなかったとしても、それは、仁という変態が世迷言のような妄想を語っただけで終わるだろうし、結果、この人の良さそうなゲイの青年をちょっと不愉快にさせるていどだろう。一方で仮に信じてくれたとすれば……。

遠藤は不安げな視線をあちこち泳がせてから目を伏せ、必死で頭の中を整理しているようすだった。

やっぱり信じられないか、仕方ないよね

当の麗華は落胆するどころか、返つてとてもすっきりした気分になつていた。

ところが。

「すごい、すごいわ、そんな話があるんだあ」

遠藤は、両目にうつすらと涙さえ浮かべて、「素敵」とオネエ丸出しの口調で大いに感動して見せるのだった。

「うらやましいわ、そんな風に好きな男の子の体になれるなんて」最早、先に自分がゲイであることを告白することも忘れ、仁の心配もそつちのけで、すっかり上機嫌で身も心も乙女になりきっていた。「そうじゃないんだってば、もう好きでもなんでもないので」

「あたしも憑依したいなあ」

「だ、誰か好きな人がいるの？」

「つつつか、その考えもきめえつつつか」

遠藤は真っ赤になって「うん」とうなずくのだった。

「な、なんか痛いな、そういうのも」

「誰にも言わないでよ」

「まあ、聞いて欲しいんだろうけど」

「そう思いながら麗華は胸が痛むのだった。」

「あのね、その子はね……」

「えええっ？」

大江戸大鉄君なんだけど。

同じ野球部だよ

しかも、あの堅物の。」

「そ、そうなんだ……」

麗華は当たり前障りのないでいどに、驚いてみせるのだった。

「どこがいいんだろう、一体。」

「そう思っている」と遠藤の方から堰を切ったように語りだすのだった。

「彼って、ずばらに見えるけど意外と細かいところまで気を使うのよ、例えば、部員全員の誕生日を憶えてるし、一年生までよ」

「ふーん……」

「試合であたしがピンチになった時なんか、いつもマウンドまできて、変な顔したりして笑わせてくれるし……」

「ふ、ふーん」

遠藤はまるで決壊したダムのように、止め処なく喋り続けるのだった。

た。

ついでに言うなら、今まで抑えていた女言葉も思う存分満喫しているようだ。

麗華には遠藤の、その幸せそうな「本来の姿」が痛々しく、見ていて涙が出そうになるのだった。

大鉄のあの性格からして、恐らく女の子との普通の恋愛すらまだ、ほとんど未経験なはずだ。

そう考えると、遠藤の大鉄への思いが成就する可能性は限りなくゼロに近いだろう。

だが一方で。

好きだった男にとことん裏切られ愛想をつかした自分と、報われる可能性のきわめて薄い片想いの遠藤と、いったいどちらが不幸だというのか。

麗華は、遠藤に対し今まで誰にも感じたことのない親近感が湧いてくるのを感じていた。

もしかしたら、こういうのを親友っていうのかも

こうして麗華は、生涯最高の親友ともを得、それ以来他にだれもいない所では「レイカ」「メアリー」と呼び合うようになったのだが、このメアリーというのは遠藤の希望で、彼は盛遠という自分の名前が気に入っていないのだそうだ。

ライバル登場

バックスクリーンの向こうには、入道雲がじっと動かずに球場を見下ろしている。

ブラスバンドの演奏と蝉時雨に混じって、どこからかヘリコプターの飛んでいる音が聞こえてきて、麗華は思わず空を見上げた。

真っ青な空だ。

はじめて歩く野球場のグラウンド。

まるで大きなすり鉢の底を這っている、蟻になったような気分だ。グラウンドから見上げる空は、いつも見ているそれより丸く、青くて高いドーム型の天井のように見えた。

地球ってやっぱり丸いんだ、と麗華は歩きながらどうでもいいことを考えていた。

痛っ……

後ろから踵を蹴られて振り返ると、八郎が引きつった顔で「振り返くんじゃねえよ」とささやく。

麗華をにらんでいるようだが、その視線は麗華の顔よりずっと後ろの、遠い所を見ているようだった。

よほど緊張しているのか、手と足が一緒に出ている。

あんたこそ、このくらいでアガってんじゃねえよ
とうとうはじまってしまった。

ゆうべあれから遠藤と外へ出てキャッチボールをした。

仁の家の近くにあるホームセンターの駐車場が、夜十時まで明かりをつけているのだ。

それが消えてからも家に戻り、深夜まで話をした。

野球のレクチャー、チームメイトの話、女の子同士？のとめどないお喋り。

特に女の子同士のお喋りはうれしかった。

一体何年ぶりだったか。

麗華は何年も溜めていた心の澱みを、洗いざらい吐き出し聞いてもらった気分だった。

実に心強い味方ができた。

自分が麗華であることを打ち明けて良かったと思う。

相手がお人よしで夢見がちな性格の遠藤であることも幸いした。

麗華本人も戸惑うほど、すんなり受け入れてくれたのだ。

もし相手が大鉄だったら、どうだっただろうか。

麗華は前を歩いている大鉄の、大きな背中を見た。

恐らくこれっぽっちも信じないだろうが、野球部にプラスになる

と解れば、話につき合って協力くらいはしてくれるのではないか。

頑固で強情だが、決して因業な性格というわけではなさそうだ。

遠藤の話では、思いやりもユーモアもあるらしいし、顔立ちだっ

て、決して悪い方ではない。

仁のような優男とは正反対のタイプだが、時々見せる笑顔は確かに魅力的だった。

なによりひた向きさと優しさがよく表に出た、好い人相……好相と言っていていいだろう。

その気になれば、結構モテそうだけど

麗華はそんな風に考えてから、ハッと我に返った。

ほんの一瞬とはいえ、大鉄を好意的に見ていた自分に腹が立つてくると、目の前の筋肉質の背中が無性に憎らしくなって、蹴飛ばしたい衝動に駆られてくるのだった。

ブラスバンドの行進曲に合わせて一步一步リズムカルに足を動かしているうちに、ついその一步を大きく前に踏み出し、気がついた時には膝で蹴っていた。

大鉄は反動で首を仰げ反らせ「痛てっ」と短く呻くと、すぐに首を後ろに捻って、

「なにすんだ、バカヤロウ」

と、麗華をにらみつけた。

その、あまりにも当たり前すぎる反応に麗華は思わず嘖き出し、

そしてアカンベーを返すのだった。

仁と比べれば、絵に描いたような平凡な常識人なのだろう。

役員の挨拶が長々と続き、選手宣誓が終わり、球児たちは整然と野球場から退出する。

野球場の外では、ついさっきまで牛のように黙りこくって歩いていた高校生たちが緊張から解かれ、同じ色のユニフォーム同士で固まって雑談に花を咲かせていた。

相変わらず緊張に青ざめている者。

力が余っているのか、チームメイトに格闘技の関節技をかけてふざけている者。

麗華と同じチームのエンリケも、ノリノリでサンバのステップを踏んでいる。

その中から不意に一つの顔が麗華の行く手を遮って立ちはだかった。

「おい」

と、そいつは不躰ぶしつけに声をかけてきた。

痩せているが、ひよろりと背だけが高い。

身長百八十センチの仁の体でも見上げるほどの高さにある顔は、

真っ黒に焼けている上頬がこけていて、ひどく小さく見えた。

「今年は去年みてえなわけにはいかねえからな」

と、神経質そうな眉間に深いシワを寄せてそいつは言った。

「え？」

麗華が、わけが分からずまごまごしていると、

「いつまでも調子に乗ってんじゃねえぞ、こら」

相手はしびれを切らしたように凄んできた。

「三日月山高校のピッチャーの鳥羽だよ、去年準々決勝でうちに負けたんだ」

いつの間にか遠藤が隣に来ていて、そう耳打ちをした。

「え？ああ、よろしく」

麗華が右手を差し出すと、今度は鳥羽の方が「え？」と一瞬戸惑

ったようだったが、すぐに「ふざけるな」とその右手を払いのけてしまった。

「去年は試合の後まで散々バカにしゃがって、急に優等生ヅラすんじゃないよ」

な、なるほど

「バカにしたんだ、ごめんね」

麗華が素直に謝ると、鳥羽は一度気持ちの悪いものでも見るような目になったが、すぐにまた麗華をにらみつけて、

「とにかくだ、今年は準決勝まではお前えと試合ができねえ、もつとも、お前えの方が負けずに勝ち上がってくればの話だがな」

と、口の端を歪めて笑った。

「うん、その時にはよろしくね」

麗華は満面の笑顔で返した。

仁になって三日目ともなると、麗華も次第に慣れて余裕が出てきたのだ。

要するに、どんなに相手から怒られようと、罵ののしられようと挑発されようと、それは仁が言われているだけなのである。

鳥羽はいまいましてに「けっ」と顔を歪めて、

「せいぜい頑張るんだな」

と背中を向けて行ってしまった。

麗華はそれを見送りながら、短く溜息を吐いた。

まったく、どこまで敵だらけなんだか、このバカ

恐らく試合で負かされた後になってまで、仁に余計な戯言ざれごとでも言われたのだろう。

「あ、今度は向学大付属高校の足利が来た」

遠藤がまたささやいてきた。

「去年うちが準決勝で負けた学校の四番だよ」

「やあ」

足利は鳥羽とは対照的に、にこやかに握手を求めてきた。

か、かっこいい

身長は仁より若干低いが、その風貌と体つきはまるでドーベルマンのように精悍である。

「今年も君とこうして再会できて嬉しいよ」

「う、うん、そうだね」

「幸運と言うべきか、不運と言うべきか、君のチームとは決勝まで当たらないが、君たちならきつと勝ち上がってくると信じてるよ」

「かっこいいけど、なんかやっぱ違う」

足利の態度は慇懃無礼というか、どこか堅苦しすぎるところがある。

「去年はたまたまうちが勝たせてもらったが、勝負は時の運だ。今年もいい試合をしよう」

「彼の先祖は、昔このあたりを治めていた殿さまなんだって」
遠藤がまた耳打ちをしてきた。

「な、なるほど」

「僕にとつて君は永遠のライバルだ、健闘を祈るよ」

「うん、君もね」

どうして野球やる人って、みんなこうキャラが濃いんだろう

「去年は彼の学校が甲子園に出て、ベスト4まで勝ち進んだのよ」
足利の背中を見送りながら遠藤は女言葉でささやいた。

「そんなに強いのか？」

麗華は知らなかった。

去年は仁と別れて、野球は全く見る気になれなかったのだ。

遠藤はため息をつきながらうなずいた。

「去年の感じでは全く勝てる気がしなかったけど、それは上級生にすごいピッチャーがいたからなの、今年はその人が卒業したからまだなんとかかなりそうだけど、でも強敵には間違いないわね」

麗華は遠藤と顔を見合わせ、肩をすくめた。

「冗談じゃないわ、そんな先のことなんて。今日の試合だってかなり危ないのに」

「大丈夫よ、相手の篠溜高校は強くないから、普通にやればうちがゴールドで勝てる相手だし、あたしが投げても完封できるようなチームなの。ほんとにだめだったらあたしがいつでも代わってあげるから」

遠藤はにっこりと微笑んでそう言ってくれた。

口調は別として、その笑顔は麗華にはひどく頼もしくみえるのだった。

麗華、マウンドに立つ

まずいな……

大鉄は思わず不安を顔に出しそうになり、慌てて押し止めた。

試合前の準備投球のため、マスクを被っていないことを思い出したのだ。

自分が先頭になって青ざめた顔など見せたら、やつはますます硬くなるだろう。

とにかく仁をこれ以上追いつめるのはよくない。

もともと仁は神経質でアガリ性で、立ち上がりは悪いのだ。

だが、今日の調子は特にひどい。

球がまったく走っていない。

本来、仁のストレートはマックスで百四十七キロ出るのだが、どういうわけか今日は百三十五キロも出ていないのではないか。

セーブしているのか？準備投球だから

いや、そうじゃない。

投球フォームがいつもと違う。

どこかギクシャクしている。

それに、変化球も全然だめだ。

仁の球種は、ストレートとスライダーとフォークボール。

スライダーは確かに曲がるが、全くキレがない。

これではちょうど打ちごろだ。

その上、ストレートに比べ極端にコントロールが悪くなるようだ。いや。ストライクゾーンから外れてくれるならまだいいが、間違っただけで真ん中などにきたら、今日の相手でも打たれるかも知れない。

フォークは要求しても投げようと思わない。

元来やつはフォークに関して特に神経質で、試合前にはしつこいほどチェックするのだが。

どうする？

怒鳴りつけて気合を入れるか。

おだててリラックスしてもらおうか。

やはり、彼女の自殺のショックから立ち直れていないのだろう。

当たり前だ、立ち直れるはずがない。

まだ一昨日の話なのだ。

今日の相手ならこれでも勝てるだろうが、なんとかして立ち直るきっかけでもつかんでもらわないと、予選を勝ち抜くのはとても無理だ。

その上観客はほぼ満員である。

予選の一回戦としては異例の盛況ぶりだ。

皆仁を見にきたのだ。

甲子園出場経験こそないがプロのスカウトの目に留まっているという噂を、皆よく知っているのだ。

特に地元の沢谷香市では、町おこしの期待も込めて、市長までが仁に注目しているという噂だった。

長い高校野球の歴史の中で、沢谷香市は一度も代表校を輩出したことがなかったのだ。

これで緊張するなという方が無理というものだ。

怒鳴りつけるのは逆効果だろう

やつは心底俺を恨んでいるようだ。

現にさつきも背中を蹴ってきた。

あんなことくらいで恨みが消えるとは思えないが、少しでもやつの気が晴れるなら、いくらでも蹴られてやるさ。

.....

マウンドの上って、こんなに暑かったのね

麗華は早くも汗びっしょりだった。

キャッチャーの大鉄までの距離も、想像していたよりずっと遠く感じる。

応援席では仁の父と母が、期待と不安の込もった眼差しでこちら

を注視している。

父親は仕事を休んで見に来たのだった。

ゆうべの遠藤との特訓の甲斐があつて、見た目はなんとかピッチャーらしいフォームになつてきたが、直球とスライダーはともかく、フォーークは全く無理だった。

とても一朝一夕で体得できるものではなかつたのだ。

投球練習が終わると、大鉄が笑いながら駆け寄ってきた。

「なんだよお前、またアガつてんのか？」

大鉄に挑発されて、麗華は少しむきになった。

「え？いや、そうでもないけど……」

すると大鉄は笑いながら、「俺もアガつてんだけどよ」と麗華の肩を叩いた。

「緒戦だから無理もないさ、でも、今日の相手はお客さまだ、落ち着くまではサインなんかいいから、全部ど真ん中に思いきり直球投げてこいよ、溜まつた鬱憤を晴らしてやれよ」

結局、どうしてもあたしが投げなきゃなんないのね……

ブルペンでの投球練習で、仁がいつもの調子を見る影もないほどの状態であることくらい大鉄が一番判つたはずだった。

だが、もしかしたら今日は遠藤でいつてくれるのでは、と密かに寄せていた期待も裏切られてしまったのだった。

「試合終わつたらまた満腹亭で特盛りラーメンとジャンボギョーザ食つて帰ろうぜ、おごるからさ」

大鉄は真っ黒に日焼けした顔に白い歯で笑い、ホームベースに戻つて行つた。

結構いいやつ、認めたくないけど

麗華は一度、大きく深呼吸した。

甲高いサイレンが、有無を言わせぬほどの大音量で鳴り渡つた。もう、後戻りはできないのだ。

ちなみに試合に臨む沢谷香高校のオーダーは次のとおりである。

一番シヨート 牛若小次郎

二番センター 花北沢悟
三番サード 鎮西八郎
四番キャッチャー 大江戸大鉄
五番ファースト 高橋エンリケ誠
六番ライト 遠藤盛遠^{メアリ}
七番セカンド 柏薔薇魔裂
八番レフト 梶原景時
九番ピッチャー 藤村仁（麗華）

ここまでできたら、やれるとここまでやるだけよ

麗華、振りかぶって、第一球。

「うおおおっ……」

観客がどよめいた。

あれ、なに？

バッターが倒れている。

主審が「デッドボール」と叫んだ。

しまった

すかさず相手のベンチやスタンドからヤジが飛んでくる。

いや、相手からだけではなかった。

「おいおい、たのむぜ」

サードを守っている八郎が、土を蹴って聞こえよがしにブツブツ言っている。

「やれやれ、天才のやることってな理解できねえよ」

シヨートの牛若がそれに続く。

「ドンマイ、真ん中投げよう真ん中」

キャッチャーの大鉄とライトの遠藤だけが、そんな意味のことを叫んで励ましてくれた。

ファーストのエンリケは、ぼんやりと相手の応援席をながめていた。

恐らくチア・ガールを見ているのだ。

どうしたんだろう？練習ではちゃんとストライクが入るように

なつてたのに

実を言つとこれには、麗華には解らない不運がいくつか重なつていた。

硬式の、試合で使うような新品のボールというのは、それなりの投球力のある者が投げると、思いもよらない変化をすることがあるのだ。

麗華は直球を投げたつもりだったが、それがほんのわずかだが汗で滑つてシュートをしてしまい、しかも相手の打者は、最初からヒットを打つのが難しいことを見越して、かなりベース寄りに被つて構えていたのである。

麗華は新品のボールを投げるのは、これがはじめてだったのだ。

味方の罵声まで浴びる四面楚歌だが、とにかく考えても仕方ないかと、気持ちを切り替える。

意外とマウンド度胸はあるのだ。

こういう時は、一塁に牽制球つてのを投げるのよね

麗華は冷静に自分の置かれた状況を把握していた。

だが。

「ボーク！」

主審がまた叫んだ。

なまじ平常心があつたことが返つて裏目に出てしまい、投げなくてよい牽制球を投げ、しかもボークになつてしまったのである。

結果、ノーアウトでランナーが二塁に行つてしまった。

麗華はまだ、一球しか投げていない。

「てめえ、なにふざけてんだバカヤロー」

今度は相手のヤジより早く、八郎が怒鳴りつけてきた。

「まったく、乗っけから忙しいこと」

牛若の嫌味がそれに続く。

「ほ、ボークつて、なに？」

それは麗華にとつて、はじめて聞く言葉だった。

麗華が見ていた試合では、仁はボーク、つまり反則投球を一度も

やったことがなかったのだ。

今麗華がやったのは、プレートを踏みながら打者に足を踏み出して
つまり、打者に向かって投げるフォームで　一塁に投げる、
という初歩的なボークだった。

なにがなんだか分からない、一体どうすればいいのよ

麗華もさすがに平常心を失い、呆然としてしまった。

ピッチャーにとって立ち上がりのボークは、ヒットを打たれるより
心理的に辛いものなのである。

「タイム」

大鉄が駆け寄ってきて、内野手を集めた。

「お前ら、さつきから味方なんかヤジっていい加減にしるよ」

八郎と牛若を咎めたが、顔は相変わらず笑顔である。

「ヤジじゃねえよ、愛のムチだよ」

八郎が苦々しげに吐き捨てる。

「そうそう、叱咤激励、切磋琢磨ってやつだね」

牛若が他人事のようにうそぶく。

「まあ、まだ点取られたわけじゃないさ」

大鉄が麗華に微笑みながら言った。

「牽制球は投げなくていい、ランナーは気にすんな。今日の試合は
三点や四点取られたって大丈夫だから、なにも考えずに投げてこい
よ」

麗華はその笑顔と言葉に救われ、少し落ち着きを取り戻して「うん」
とうなずいた。

な、なんか、認めたくないけどありがとう
だが。

「バカヤロウ、緒戦の弱小相手だからこそ、完璧に勝って勢いをつ
けるんじゃないかねえか」

八郎が割って入ってくる。

「そうそう、獅子はうさぎ相手にも全力を尽くすってやつだね」
牛若がそれに続く。

「分かった分かった、打たせるからお前ら完璧にやれよ、うちの守備にはつけ入る隙なんてないってところを見せつけてやるうぜ」
大鉄は笑顔で二人をなだめてから、鋭い目になり「しめていくぜ！」と気合を入れた。

八郎も牛若も「おう、あたりめえだ」「どんどんこいや」と口々に叫びながら守備に散って行った。

大鉄は一人残り、再び麗華に笑顔を向け、

「みんなまだ、硬さがとれなくてイライラしてるんだよ、野手つてのは、最初の打球を捌くまで落ち着かないからな。ランナーは気にしないでいい、お前はバッターに思いつきり投げるだけでいいよ、ヒット打たれてもいいから打たせていこうぜ、あいつらにいっぱい仕事してもらおう」

そう言い残して戻って行った。

すごい

麗華は遠藤の言葉を思い出した。

試合になると本当に頼もしいやつ。

まるで別人のように生き生きとしている。

あんな曲者連中を、ほんのわずかのやり取りで、調教師のように操ってしまった。

大鉄自身だって、緒戦の不安は同じはずなのに。

それになんという目をするのだろう。

あれは子供が、楽しい遊びに夢中になっている時の目だ。

生きているのが楽しくて仕方ない、という目だ。

そんな目で見られ、麗華もいつの間にか落ち着きを取り戻しているのだった。

次のバッターは早くもバントの構えをしている。

「いいぞ、やらせるやらせる」

大鉄が両手を広げて大きく構えた。

バントなら、何度も見たことあるわ

麗華は投げるのと同時に飛び出す。

だが。

「うわっ、痛てえ！」

夢中で打球を追いかけて、八郎とぶつかってしまった。

麗華もそのまま倒れ、一塁・三塁オールセーフになってしまうのだ。
った。

「バカヤロウ、テメエはファーストのカバーだよ……っつか、初球から簡単に三塁線にバントさせんな、このドアホウ」

八郎は真っ赤になって麗華に食ってかかった。

な、なによ、カバーってなに？ピッチャーって投げるだけじゃないの？

麗華は再び、なにがなんだか解らなくなってしまった。

マウンドに戻りながら、スタンドを見上げると、仁の父親がうなずきながら、こちらに向かってなにかを叫んでいる。

隣の席では母親が、お祈りをするように両手を合わせ、強く目を閉じてうつむいていた。

その上の座席を見て麗華は愕然とした。

そこにはあの胡桃美琉久がいたのだが、その目。

遠くから気味の悪い動物でもながめているような、蔑んだ目でこちらを見下ろしていた。

好きな男が頑張っているのに、よくあんな目で見られるわね

麗華は唾を吐きたい気分だったが、今はそれどころではなかった。

次の打者へ、第一球。

はじめてストライクが取れたが、一塁ランナーには簡単に走られ二塁に行かれてしまった。

だが、これでなんとか、ストライクを投げる感触はつかめた。

第二球。

「走った！」

麗華が足を上げたところで、サードの八郎が叫んだ。

大鉄はその声より早く、立ち上がっていた。

相手のスクイズを完全に読んでいたのだ。

だが。

え？

普通にストライクを投げるのが精一杯の麗華が、投球動作の途中からウエストボールを投げることはできなかった。

ボールは大鉄のはるか頭上に逸れ、大鉄が思い切り飛んでも届かなかった。

二人のランナーが次々と、ホームに還った。

ホームのカバーに入っていた八郎が、グローブをグラウンドに叩きつけて麗華になにか怒鳴っている。

用もないのに、小次郎が麗華の隣まできて、小声で、毒を吐き捨てるようになにかささやいている。

だが麗華にはなにも聞こえず、視界に入る景色も陽炎のように歪んで揺れているのだった。

しばらくの間、遊びにまぜてもらえない子供のように、そうして立ち尽くしていた。

かなり長い時間だったような気がするが、時間にすれば一分もたっていないかったかも知れない。

やがて、真つ暗なベンチから監督が姿を現し、ピッチャー交代を告げるのを、麗華は他人事のようにながめていた。

大鉄と遠藤が近寄ってきて、なにか優しいげな声をかけてくれたようだったが、結局その二人に促されベンチに下がった。

「お前はもう必要ない」と、その時誰かが言ったような気がした。八郎だったようでもあるが、誰も言っていなかったようでもあった。

結局この世に必要な人間

自分の心の中の自分がそうささやいたようだった。

ベンチに戻る際、スタンドの仁の父親と目が合った、父親は真つ直ぐに麗華を見てうなずいていた。

母親は両手で顔を覆っていた。

その後ろの座席に美琉久の姿はなかった。

探す気もなかったが、近くの大きな出入り口の階段に向かって歩く

姿がすぐに見つかった。

出入り口脇のゴミ箱に沢谷香高校の応援の小旗を捨て、そのまま階段を降りていくのが見えた。

泥試合の後も泥沼？

自転車で橋の所に差しかかると、にわか雨はうそのようにあがり、強い日差しが戻ってきた。

いつの間にかあたりの木々では蝉が啼いている。

シャワーのような雨に打たれ、下着まですぶ濡れになると麗華は返ってすっきりした気分で、いつもより少しだけ水嵩の増した川の流れをながめていた。

終わった

試合後のミーティングは、まるで負け試合のように重苦しく沈んだ反省会だったが、最早誰一人麗華を責める者はいなかった。それはまるで欠席裁判のようだった。

あたかもその場に麗華がいないかのようになり、「今後遠藤でどう戦うか」ということにはばかり議論は終始したのだ。

試合は十対四。形の上ではうちの完勝だった。だが、完封、コールド勝ちで当たり前と思われていた相手に思わぬ苦戦を強いられた八郎たちチームメイトは、怒りを通り越して完全に麗華を見限っているようだった。

「監督、俺にも責任があります」

大鉄がそう言って、全員にかけ合ってくれた。

「こいつ一昨日、付き合っていた女の子が自殺したんです、俺が二人の交際をじゃましてたんです、こいつはまだ、シヨックから立ち直れていないんです」

遠藤もそれに被せて、麗華を弁護してくれた。

みな、そのことは初耳だったようで、一応驚いて見せたが、彼等が長年くすぶらせていた麗華への不信感を覆すには及ばず、結局二人の意見は隅に押しやられてしまったのである。

麗華もそんなやり取りを、薄笑いを浮かべながら聞いているしかなかった。

もう、いいよ

みじめさも度を越えると、そんな力のない嗤いしか出てこなかった。これで自分の無力さは証明された。

次の試合から遠藤の先発でいけばいい。

ただそれだけのことではないか。

「今から遠藤の先発を想定した練習をしよう」

練習オタクの八郎がそう言い出したところへ、にわか雨が降り出し、ミーティングが解散になったのである。

麗華にとってはそんな雨も渡りに船だった。

「肩が冷えるから」と心配する大鉄を振り切って、逃げるように帰ってきたのだった。

とにかくこれで終わった。

形はどうあれ、試合は勝ったのだし良かったではないか。

次の試合は十七日。

七日もあれば、いくらなんでもフィリッパだって仁を連れ戻してきてくれるだろう。

これで思い残すこともなく、自分も霊界に行けるのだ。

川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず……か

川の水はいつもより濁っていて、仁の顔が映ることはなかった。

早ければ今日、明日にでもこの体から出られるのだ。

一応やることはやったんだから、木にされるなんてこと、ないよね

麗華は苦笑しながらペダルを踏み出した。

仁の家に着いて玄関の前にしばらく立ち尽くした。

仁の両親は、さぞがっかりしているだろう。

恐らく、二人して努めて明るく振舞い、当たり障りのない言葉をかけてくるに違いない。

だが、自分は決してこれに同調してはいけない。

うっかりそんな優しさに引き込まれたところで、お互いに良いことなどないのだ。

自分がこの世に未練を残すより、さつさと仁と交代してもらった方が、チームにとってもあの両親にとってもよい結果になるのだ。そう考えると、麗華は少しだけ寂しい気分になったが、自分だけのことを考えて「あの世」へ行こうと、割り切るのだった。

麗華の最後の務めとして、彼らと同じように明るく振舞い、こちらも当たり前障りのない言葉を返していればいいだけのことなのだ。

麗華が扉に手を伸ばすと、扉は中から開けられた。

中から顔を出したのは仁の父親だった。

「なんだよお前、そんなに濡れて、とにかく着替えてこいよ」

その様子を見て麗華は少し拍子抜けするのだった。

父親はがっかりした様子もなく、不自然に明るく振舞うでもなく、そう声をかけてきた。

もしかしたら、それは麗華が知る限り最も自然な「お父さん」の顔かも知れなかった。

キッチンのテーブルには、今日の祝勝会のために用意したらしい「馳走がところ狭ましと並んでいた。

しかも今度は肉ではなく、寿司や刺身ばかりである。

「今までお前にはすまないことをしたな」

麗華が着替えて椅子に座ると、父親が正面に座り静かにそう言った。きた。

母親はずっとこちらに背を向けたまま、鍋でなにかを煮込んでいた。

「え？」

芝居がかった励ましの言葉を予想していた麗華が驚くと、父親はゆつくりと続けた。

「お前、苦しかったんじゃないか？子供のころからみんなに期待されて」

「そ、そんなことない……と、思う」

父親は珍しく居住まいを直し、正面から麗華を見ている。

麗華に向かって「まあ、食いながら聞けよ」と勧めると、淡々と語りだした。

「お父さんもな、正直なこと言っちゃまうと、そりゃ確かに期待してたさ、こんなしがたない小さな町工場の作業員の息子が、甲子園に出てプロに入って稼いでくれるかな、なんてな。俺たちもそんなお前のことを確かに自慢に思っていたよ。でも、それはお前に俺みたいな人生を歩んで欲しくなかったからそう思ってたんだよ。でもな、野球でプロなんぞになるより、お前がこの二日間、どういうわけか急にいい子になってくれたのが、お父さんもお母さんもどれだけ嬉しかったか、お前のお陰で俺も母さんも目が覚めたよ」

「目が覚めた……って？」

「お前が苦しんでいるのを知っていながら、上手に励ますことも、お前の我儘を叱ることもできなかったのは、決してお前に対する優しさなんかじゃなく、俺たちが逃げていただけだってことさ。仕事場でちよつとお前の自慢がしたいとか、高校を卒業したら少しお金を稼いでくれるんじゃないかなんて、結局自分のことばかり考えてたわけさ。それがお前のためになんか、これっぽっちもなっていないって気がついた時には、もう手遅れだった」

麗華は「うっ」と息を漏らし、肩に下げていたタオルに顔をうずめた。

自分の中で、なにかが壊れる音が聞こえたようだった。それは、自分の感情を抑えていた堰が壊れる音だった。涙が、後から後から止まらなくなった。

「もう、いいじゃないか」と、父親は言った。

「地元の英雄とその親、なんて肩書きは、もういいじゃないか、次の試合で負けようが、野球辞めようが、お前がいい子になってくれさえすれば俺たちはそれで充分だよ、お前はやっぱり俺たちの自慢の息子だよ」

そう言つと父親は幸せそうな顔で笑った。

「なあ母さん」

父親が声をかけると、母親ははじめて振り返つて「ええ」と笑った。

「まるで仁が小学校の……野球をはじめる前に戻ってくれたみたいだったわ」

母親の目は真つ赤に腫れ上がっていたが、その顔は晴れやかだった。「思い出すよなあ……」

母親の言葉につられて、父親は遠い目をしながら湯呑み茶碗を口元に持っていった。

今日は晩酌をしないつもりらしい。

「だめよ、お父さん」

麗華は堪らず叫んでいた。

「まだ大会は終わったわけじゃないんだから」

麗華が激しく首を振ると、涙があたりに飛び散った。

だが、それだけ言ってみたものの、その先の言葉が出てこない。説明のしようもないのだ。

両親はしばらく驚いたような顔で呆気にとられていたが、お互いに顔を見合わせ「ああ、すまんすまん」と父親が慌てて謝った。

「そうだな、大会はまだはじまったばかりだったのに、負けるとか辞めるなんて不謹慎なこと言っちゃまったな」

そうじゃないの、違うんだってば

「とにかく、今日のあたし……俺、は本当の俺じゃないんだから」

麗華がそう言いかけた時、玄関のチャイムが鳴った。

「大鉄君がきてるわよ」

戻ってきた母親が、麗華に告げた。

……

一体、なんて言って声をかけりゃいいんだよ

仁の家まできてみたものの、自分がなにを言いに来たのかという説明すら大鉄はできないでいた。

励まし、叱咤、最後の忠告、お別れの挨拶。

はつきり言えばその全てなのだが、いくら叱咤激励したところですでに手遅れとも思えた。

思えばこれほど扱いの難しいピッチャーもいなかった。

おだてれば凶に乗りすぎるし、叱りつければ臍を曲げて練習を休みやがる。

せめて八郎の半分でも練習してくれれば。

それでも本番の試合で見せる速球の非凡さは本物で、だからこそ自分もそれに惚れ込み、数限りない理解不能の悪ふざけにも付き合ってきたのだった。

昨日からの気持ちの悪い女言葉も、責任の一端を感じているからこそ聞き流してきたのだ。

責任は確かに自分にもある。

だが、今日の試合でのやつプレーは、ただの感情のこじれからきているだけではないのではないか。

あまりにもひどすぎる。

小学生だって、あれほどひどくはあるまい。

ただ単に体調が悪いとか、集中力がなくなっているとかのレベルではなかった。

そうだ、その原因を見極めるのが、俺の最後の責任だろ

みんなは強がってあんな風に言っているが、次の相手の目蒲学園はそんなに弱い学校じゃない。

遠藤一人では、恐らく勝てまい。

なんとかあいつとみんなを繋ぎとめる橋渡しでもできれば。

それには、あいつと腹を割って話を聞いてみなくては。

玄関から出てきた麗華の顔を見て、大鉄は一瞬目を見張った。

いくらタオルで涙を拭いても、麗華の目からはまだ涙があふれていたのだ。

「お前、そんなに悔しいんだったらもっと練習まじめにやってれば

……」

大鉄があきれて咎めると、麗華は「ごめん」とさえぎった。

「まじめに練習するから、見捨てないで」

そう言って抱きついてきた。

き、気持ち悪いな

「練習するって、今からか？」

「うん」

「遅くねえか？今さら」

「死んだ気になってやるわ……一度死んでるからそれは大丈夫」

「死んでるって……ま、またわけわかんねえ」

「とにかくお願い、いろいろ教えて、なんでも言うこと聞くから、もう少しだけ付き合って」

「俺にできることならなんでもするけど……」

大鉄はそう言いかけて、背後に強い気配を感じて振り向き驚いた。

「え、遠藤……」

遠藤が呆気にとられて立ち尽くしていた。

麗華は「きゃあっ」と悲鳴をあげて、大鉄と離れた。

「きゃあ？」

「ち、ちがうのよ、そうじゃないのよメアリー」

メアリー？

「お前、いつからそこにいたんだよ？」

遠藤は後退りしながら「さっきからずっと」と麗華と大鉄を見比べた。

「仁が落ち込んでると思って、大黒屋のケーキを買ってきたんだけど……」

「誤解しないで、別に変なことしてたわけじゃないんだから」

麗華の言葉で混乱していた大鉄も我に返って「そ、そうだよ、誤解だよ」と、苦笑いした。

「俺、そんな気持ちの悪い趣味ないから、ははは……」

だが、遠藤は余計に悲しげな目になり、

「そんな、気持ちの悪い趣味って……」

と、泣き出しそうになるのだった。

人の思いというものは、言葉にしなければ伝わらないことがある。

だが、言葉にしたところで伝わらないこともある。

この三人にとって幸運だったのは、大鉄という人間が、自分の頭で

理解できないことを敢えて理解しようとしないう性格だったことなの
だろう。

一体どこまで面倒なんだよ、こいつら
大鉄の頭では、そこまでが精一杯だった。

それぞれの夏

「おい二年！」

鳥羽茂男はグラウンドに入るなり、額をひくつかせながら怒鳴った。恐ろしい形相だ。

三日月山高校野球部、総勢二十三人の二年生部員は全力疾走で鳥羽の前に集合した。

皆血相を変えて、中には「ひっ」と小さな悲鳴を漏らしている者もいた。

突然の「集合」だが、皆よほど慣れているのか、まるでマスゲームのように整然と鳥羽の前に整列する。

無礼なほどに綺麗な「気をつけ」の姿勢は、一糸乱れぬ緊張感で今にも張り裂けそうだった。

「とりあえず跳べや……」

「跳べ」とはジャンピングスクワットをしろという意味だ。

「とりあえず」で三百回。

「しばらく」で五百。

「いいというまで」で千回、以前には二千回になることもあった。

「跳びながら答える」

鳥羽は、人嫌いな野良犬のような濁った目で、二年生部員を見下ろしている。

身長百九十三センチの鳥羽の顔は、二年生がジャンプするより高い位置にある。

真っ黒に焼け、痩せた顔の眉間に怒り皺を寄せると、とんでもなく迫力があつた。

「お前ら、タマに洗濯させてただろ？」

二年生たちの黒目が一斉に小さくなった。

「なんで一年生にやらせないのかなー？」

鳥羽はまるで幼稚園児にもものを尋ねるように首をかしげるが、その

充血した目は殺気をはらんで大きく見開かれている。
キレる寸前の目だ。

「し、知りませんでした」

鳥羽の正面の男が跳びながら答えた。

「今年の一年生さまはすいぶんとお偉いんだね、おい。三年の玉川たまがわ先輩に洗濯までさせるんだもんねー」

「すいませんっす」「知りませんでした」

二年生たちは真っ青な顔で、口々に叫んだ。

彼らにとっては、寝耳に水だった。

三日月山高校野球部では、三年生と一年生は直接口をきくことすらない。

一年生のかした不始末は、二年生が責任をとる決まりなのだが、一年生の仕事であるグラウンド整備や洗濯などの雑用に、二年生が付きつきりで指示を出すのは、せいぜい最初の一週間である。

一年生が四月に入部して三ヶ月もたつこの時期に、ほとんど目が行き届かなくなっているのは、むしろ当然といえた。

逆に、入部してまだ三ヶ月しかたっていない一年生が、三年生である玉川太たまがわに、「自分が洗濯する」と言われ、断われないのはむしろ当たり前でもあるのだ。

「てめえら、そのうちケツまで拭かせる気なんじゃねえか？俺らに」
鳥羽がそう言って全員をにらみつけた時、グラウンドの外から一人の部員がのそのそと走り寄ってきた。

身長百六十センチの短たかく？はぽつちやりと太り気味で、短い手足をばたばたと泳がせながら走る不様な姿は、とても野球部員とは思えない。

「シゲちゃん、もういいよ、俺がやるって言ったんだよ」

玉川太は鳥羽の隣になると、子供が親にすがりつくように見上げて言った。

長身の鳥羽と小太りの玉川が並んで立っていると、まるで一昔前の漫才コンビのようである。

「だから、なんでテメエがやんだよバカヤロウ、そんなこたあ一年坊にやらせとけよ」

「だって、他に俺にできることなんてないし……」

玉川は口の中でそうつぶやいて一度うつむいてから、

「みんな、ごめん。俺が悪かったんだよ、やらなくていいよ」

と、二年生に向かって両手を振った。

鳥羽はよけいに目をつり上げて、「うるせえ」と怒鳴った。

「見せしめだ、全員しばらく跳んどけや」

そう吐き捨ててその場を離れてしまった。

「とりあえず」が「しばらく」になつてしまった二年生たちは、それでも返つて安堵の表情で「ごつつあんです」と元気よく返事を返した。

「いいと言つまで」と言われなかつただけまだましなのだ。

一年生たちは、その地獄絵図を呆然と見ているしかなかったが、中にはべそをかいて泣き出す者までいるのだった。

玉川は心配そうに何度も二年生たちを振り返りながら、鳥羽の後について歩いた。

「なあシゲちゃん、もういいよ、止めさせてやれよ」

だが、鳥羽はそれには答えず、

「お前えはベンチ入りしたんだぞ、いつまでも雑用なんぞしてんじゃねえよ」

と言った。

「だって、それはシゲちゃんが……」

玉川のベンチ入りは鳥羽が監督に強く推薦して、強引に決めさせてしまったのである。

「関係ねえよ」

鳥羽は吐き捨てるように言ってから、薄笑いを浮かべて、

「どうせ誰がスタメンになつたって、誰も打てやしねえんだからよ、うちのチームは」

と鼻で嗤った。

「全員案山子だよ、カ・カ・シ……泣けるぜ、女の子入れたって
いいくれえだよ」

玉川が回りを見ながら「シゲちゃん」と鳥羽の腕を引っばる。
近くにいる三年生たちには、二人のやり取りが全て聞こえている
ようだったが、皆聞こえないふりをしていた。

玉川は鳥羽の幼なじみだった。

もっというなら、たった一人の友達である。

人一倍大きな体と、その猛獣のような性格が災いして、誰一人近
寄ってこようとしない鳥羽と、気が優しくお人好しだが、見た目と
性格の鈍臭さで回りの人間からほとんど顧みられない玉川。

体格も性格も正反対だが、周囲から孤立している点においてだけ
よく似たこの二人はなぜか子供のころからウマが合うのだった。

「俺はシゲちゃんと一緒に野球ができるだけでいいんだよ」

それが玉川の口癖だったが、野球のセンスはその外見どおりゼロ
で、チーム内では一年生も含めて最も下手だった。

しかし、本人もそのことはよく理解していて、練習よりも雑用に
熱心で、いまだに一年生がやるような仕事でも喜んでやっているく
らいなのだが、そんな先輩の姿は下級生から見ても野暮ったく見え
るもので、一年ほど前に下級生の中から彼に軽口を叩く者まで現れ。
何年か前に多摩川に出現したアザラシに彼の見た目と名前が似て
いることから、そのまま「タマちゃん」というあだ名で呼ぶ者が出
てきてしまったのである。

玉川本人は全く気にしていなかったが、これが運悪く鳥羽の耳に
入り逆鱗に触れ、今の二年生全員が二千回「跳ばされた」のが、実
はこの時だったのだ。

「だあああつ、ちくしょうめ！」

鳥羽は無性にいら立つ自分を押え切れないように絶叫したが、グ
ラウンドにいる者は誰も振り向きもなかった。

はじめて見る者にとっては異様な光景かも知れないが、これはい
つものことだった。

試合が近くなり、練習が軽いメニューになると、鳥羽は力を持て余し、傍目も気にせず爆発的な不機嫌さをまる出しにするのである。鳥羽のそんな姿はさながら、エサを求めて咆哮しながら徘徊する肉食恐竜のようである。

「チーム打率二割のスタメンが聞いて呆れるぜ、センスの無さじや全員がお前えといひ勝負なんだよ」

だが、鳥羽が嘆くのももつともな話で、チーム打率二割というものほとんど鳥羽が打って上げているアベレージであり、つまりこのチームの勝った試合のほとんどは鳥羽が完封し、自分で打ってきているのである。

「三百球……?」

「投げ込みを?」

八郎と牛若が目丸くする。

「合宿ん時だつてそんなに投げなかつたじゃん、あいつ」と、八郎。

「まさに怠け者の節句働きつてやつだね。もう大会はじまってんの、今ごろそんな無理したつて体壊すだけじゃんかよ」

と、牛若。

「それに疲れだつて残るだろうが」

と、二人顔を見合わせてうなずき合う。

大鉄は「なんだよお前ら」と、皮肉っぽい笑いを返す。

「あいつはもう戦力外なんだろ?今さら体壊したつていいだろが別に」

「まあ、そりゃそうだけどね」

牛若が苦笑いしながらうなずく。

「実は昨日も家に帰つた後、俺相手に二百球投げたんだよ。いや、手のひらが痛てえ痛てえ……」

大鉄はわざと満足そうな笑みを浮かべながら左の手のひらを二人に見せた。

本当は百五十球だったのだが、みんなの気を引くために少し大きさに吹聴しているのだ。

「ほんとかよ?」

練習と聞くと、さすがに八郎は喰いつきがいい。

「冗談じゃないよ」

最も反発したのは、仁に次いで練習嫌いのエンリケだった。

「やっと大会がはじまって、練習が少なくなったつてのに、こっちまでとばっちりがくるじゃないの」

「いやいや」

と大鉄は首を振った。

「お前が仁の球受けりゃいいだろ、チンタラ守備練してるより楽だぜ」

「なるほど、そうだな」

エンリケは目を輝かせ、あっさり快諾した。

この大男は「楽」と聞くと喰いつきがいいのだ。

「けっ」

と、八郎は吐き捨てた。

「バカ言ってんじゃねえよ、たった一週間で今までサボった分が取り返せるだあ? ナメるにもほどがあるぜ」

だが、その目はどこか嬉しそうだった。

あ、暑い……く、苦しい……

ブルペンには木陰になっているがグラウンドを渡ってくる熱風が体中にまとわりつくようだ。

野球のユニフォームって、なんでこう、二枚も重ね着しなきゃなんないのよ

麗華はすでに、二年生を相手に百五十球投げていた。

昨夜、結局フィリップは現われなかったが、そんなことはもうどうでもよかった。

と言うより、そちらの方はほとんど忘れていくくらいだった。

今の麗華はとにかく時間が惜しかった。

寸刻を惜しんで野球漬けでいたかったのである。

この投げ込みの後も、大鉄と遠藤にたのんで居残り練習の約束をしてあるのだった。

昨日の試合で大失敗をしてしまった牽制球とバント処理は言うに及ばず、挟殺プレーやサインプレーなど、やることは山ほどある。

投手とはいえ、当然バッティングの練習もしなくてはならなかった。

負けるもんですか……これ以上あのお父さんとお母さんを悲しませるなんてできないわ

麗華は本格的にスポーツに没頭するのはこれがはじめてだった。

中学では手芸部に所属し、高校では「リラックマクラブ」というクマのぬいぐるみを作り続けるサークルに入っていたのである。

そんな麗華にとって、生まれてはじめて大きな目標に向かってハードなメニューを一つ一つ消化してゆく充実感は全てが新鮮であり、苦しいながらも楽しくもなってきたのだった。

麗華は少しずつ変わってきていた。

一球一球投げることに増していく球速は、生身の人間としての成長を意味し、それにつれて流れる汗と溜まってゆく疲労は生きていく証を麗華に自覚させてくれるのだった。

なんだか素敵、生きてるって感じがするわ

たまたま人生の幕を自分で引いてしまったが、実際には成長期の少女であり、まだまだ人生をやり直すには十分な年齢なのである。

ハンマー王子

ゴギーン！

ガギーン！

向学大付属高校野球部第二練習場では、不気味な金属音が鳴り響いていた。

金属バットでボールを打つ快音ではない。

鉄と鉄がぶつかり合う、昔の鍛冶屋の作業音のような音である。

「足利、もうそれくらいにしておけ」

監督の勅使河原が呆れた顔で声をかける。

「あと十五本であがります」

足利は肩で息をしながら、ちらりとそちらに顔を向けた。

顔からは汗が滝のように流れている。

手に持っているのはバットではない、ハンマーである。

土建業者が工事現場などで使う、先端が鉄でできているハンマーである。

打っているのも野球のボールではなく、陸上競技のハンマー投げで使うハンマーである。

つまりワイヤーのついた鉄球だった。

それを上から吊り下げて、ハンマーの先端で打っているのだ。

うふ、うふふふ……藤村君。僕のバッティングは更なる高みに達したぞ

足利は今日の試合で二本のホームランを打っていた。

その他の打席は全て敬遠されたのだ。

試合は十五対三で圧勝だった。

僕にとってこの一年がどれだけ長かったか

去年の準決勝、向学大付属は沢谷香高校に試合では勝ったが、足利は個人的に仁に完全に押さえ込まれたのだった。

三打数二三振、一内野フライ。

まさに完敗だった。

仁のちゃらんぽらんな性格は、足利のような真面目で思い込みの激しいタイプとは、実に相性がよかったのである。

最終打席で打ったホームランは、仁に代わって出てきた三年生のリリーフから打ったのだった。

練習不足の仁がスタミナ切れを起し、途中で交代したのである。

だが、足利にとってそれは耐え難い屈辱であり、以来彼はこの打撃練習を毎日百本、日課としてきたのだった。

嬉しいぞ、藤村君。僕は君と対戦するためだけに、一年間この特訓を続けてきたんだ

足利にとって不幸なのは、去年の夏の大会以来、仁とは一度も対戦することができなかったことだ。

去年の大会以来、沢谷香高校はどういうわけか　ほとんど仁が原因なのだが　秋も春も向学大付属と対戦する前に負けてしまっており、足利は仁との遺恨を晴らすことができずに今日に至っているのだった。

「もう大会がはじまってるんだから、ほどほどにしとけよ」

勅使河原は苦笑いしながら言った。

「そんなアホな練習、ほとんど意味ないし」

そんな言葉が喉元まで出かかったが、口には出さなかった。

まあ、放っておいてもこいつは勝手に打ってくれるんだし、気のすむようにさせておくか……

勅使河原は自分の肩を叩きながらため息をついた。

「五回コールドで十五点だってよ……」

「足利はホームラン二本だって？相変わらず景気がいいね、向学大は」

「大暴れだな」

八郎と牛若が首を振りながら呆れる。

「いよいよシード組が出てきたな」

大鉄はやや緊張した面持ちでつぶやいたが、その声は心なしかいつもより元気がなかった。

「三日月山は一對ゼロだってよ、鳥羽がノーヒットノーランだと」
八郎はわざわざ持つてきた朝刊を皆に見せた。

「相変わらず渋いね、あそこは」
牛若がいつものことばかりに、それを一瞥して言う。

「あと新聞には書いてねえけど、鳥羽のやつエラーした味方に食ってかかって、あわや退場寸前なんて一幕もあつたらしいぜ」
「味方と乱闘かよ」

牛若が肩をすくめる。

「これまた相変わらず殺気立ってんね、やつこさん……で、その一点つてのも鳥羽が打つたんだろ？」

「いや、玉川つてやつがサヨナラヒット打つたつて」

牛若が「えっ」と驚いて八郎に手を伸ばし新聞を受け取った。

「誰だそいつ、一年生か？」

「いや、三年だよ」

大鉄が答えた。

「鳥羽が二塁打打つて、その玉川つてやつが代打で出てきてヒット打つて還したんだつてさ」

「聞いたことねえぞ、そんなやついたつて？」

八郎が首をかしげて言う。

牛若が写真を見て「ああ……」と叫んだ。

「こいつ、あのマネージャーじゃね？」

「ああ、そう言えばそんなやついたな、太った体でうるうるしてる、よく歩くアザラシみてえのが。あいつ、選手だったのか」

「まあ、よそはよそ。うちはうちだよ。とにかく明日の試合を勝たなきゃな」

大鉄はあえて声を励まして言った。

「そうそう、なんだつてしがないノーシードだからね、うちの場合」
牛若がさりげなく皮肉るが、その目はどこか自信に満ちていた。

「まったく、藤村の野郎が、もっと早く今みてえなやる気を出してくれればよ……」

八郎も舌打ちをするが、顔はにやけている。

むしろ笑いが止まらない、といったところらしく、その証拠にこんな風に話を続けるのだった。

「でもまあ、俺としちゃあ一試合でも多くできる方が楽しめるけどな」

「そうそう、終わりよければ全てよし、ってやつだね、それにノースードから甲子園なんてのもカッコいいし……」

「甲子園？」

牛若が思わず口にした言葉を二人はもう一度復唱し、固まって顔を見合わせた。

「……もしかして。ほんとは行けたりしてな……その、甲子園、とか」

「いいなあ、行きてえなあ、甲子園……」

二人はうっとりして、遠い目になるのだった。

大鉄は独り、暗い面持ちで二人をながめていた。

まずいな

それは大鉄も密かに恐れていたことだった。

仁（麗華）の指の血豆が潰れたのだ。

この一週間の仁は、明らかに投げすぎだった。

当然大鉄も黙って見ていたわけではなかった。

疲労や故障のことも含めて再三「やりすぎ」を注意したのだが、仁が頑として止めようとしなかったのだ。

今日は試合の前日ということもあり、監督と大鉄の説得でさすがに仁も渋々ながら普通の調整に切り替えたのだが、一度潰れてしまった血豆が明日までに固まることはないだろう。

やはりこの一週間の急な無理のツケがきたのである。

それにしても、と大鉄は改めて感心していた。

エースの存在感がチームにこれほど大きな影響を与えるとは。

この二三日、沢谷香高校ナインの雰囲気は過去に例をみないほどよくなってきていた。

当初懐疑的だった八郎と牛若も、今ではすっかり仁の「やる気」を信用しているように見える。

まさかこのチームが、ここまでまとまってくれるとはだが、と大鉄は一方で冷静に考える。

いくら仁が頑張ったとはいえ、それは現実には、この、たったの一週間なのである。

今自分がすっかりやつの血豆の話などすれば、八郎も牛若も手のひらを返し、それ見たことかと仁を再びなじり、チームはたちまち数日前のあのギスギスした雰囲気に戻ってしまうに違いない。

つまり、部員同士の信頼といっても、やっと芽が出てきたところなのである。

それを本物にするには、黙って試合で結果を出すしかないのだ。全てがもう一歩なのである。

やっぱりみんなには黙っていようか

大鉄は独りため息をついた。

この男は、とことん苦労性にできているのだ。

覚醒　ハッピーバースデー・トゥ・ヒロイン

「どおおおりゃあああ！」

「ナイスサード」

フツ……また捕っちまったぜ

八郎は今日三度目のダイビングキャッチを決め、ニヒルに微笑むのだった。

それにしても世間ってな冷てえもんだぜ

八郎はスタンドを見回し苦笑いする。

一回戦での仁の醜態に皆呆れたのか、今日はあの日の三分の一も観客は入っていないかった。

だが。

「ノツてきたノツてきた。ノツきたぜ」

思ったとおり今日の彼は忙しい。

調子のいい時の仁ならば三振の山を築くはずだが、今日はよく打たれる……というより打たせている。

やはりあの投げ込みの疲れが出ているのだろう。

当たり前前えだぜ、あんなに無理すりゃ

だが、八郎にとっては楽しいことこの上ない。

やっぱ野球はこうでなくちゃ。

相変わらずぶざけて女言葉なんか使いやがって、やつの人間性は今でも許せんが、野球に関しては、話は別だ。試合は手を抜かねえぜ

「チエスツットオオオ！」

見る、この華麗なグラブさばき。

とにかく人間性は許せんが

一方牛若は。

「ふんっ！」

「ナイスシヨート」

フツ……笑止！ファインプレーなど素人好みのけれんですよ
体全体がグローブなどとは悠長な話だ。

ショートストップというポジションはファンブルすることすら許さ
れない。

ちよつともたつただけで内野安打になってしまつのですよ。

見よ、この職人芸。

打球の方角を瞬時に、そして正確に見極め、しっかりと体の真
ん中で確実にグローブに収め、一塁へ……しかも。新品のボール
は遠投になるほど変化するから、それも計算に入れて。遠投する

「ふんっ！」

基本の積み重ねこそ、美しいんです。まあ、うちの三遊間が鉄
壁の鬼門であることを教えてあげましょう
そしてエンリケは。

試合したかったんだよなー目蒲学園。ここのチアガールは県内
一だぜ、ふふふ……ってまた内野ゴロ打たれやがったよ、めんどく
せえな、頼むからチアガールに集中させてくれっての、たまには二
十七人連続三振とかできねえのかよまったく。ぶつぶつ……

そもそもブラジル系の彼がなぜサッカーではなく野球を選んだか。
それは、サッカー場では広すぎてチアガールがよく見えないから、
という理由に他ならなかった。

しかも距離が遠い上にサッカーというスポーツは忙しすぎて、じっ
くり鑑賞しているヒマがないのだ。

それに引き換え野球の、特にファーストのポジションは彼にとって
特等席なのである。

距離が近い上に下から見上げられるという余禄までついているのだ。

これだからファーストのポジションは誰にも渡せねえんだよ

一応遠藤も。

これじゃあ俺の出番はないかな、この試合

俺が君の近くに行けるのは、試合が負けそうな時だけ。

勝てそうな試合は、いつもこうして君を遠くから見ているだけ。

大鉄

でも、負けたら、君とはもう一緒に野球ができないんだね。最近麗華も君のことを完全に見直したみたいだ。もしかして、気があるのかな。

俺は遠くから二人を見守っているしかないのかな……。その大鉄は。

「ふふふ……」

マスクの下で頬が緩みっぱなしだった。

とんだ取り越し苦労だったぜ

いつものように三振がとれない仁を誰も非難することなく、皆自分のプレーに集中している。

しかもこいつら確実にレベルが上がってる。

それも全員がかなりのレベルだ。

これもやつのお陰というのは言い過ぎかもしれないが……

皆、仁というモンスターに呑み込まれまいとあがき続けたお陰で、一人ひとりが強くなっている。

そもそも、弱者同士の馴れ合いやなくさめ合いをチームワークだなどと称するのは、弱いチームの欺瞞きまんでしかないのだ。

強い「個」がお互いにしのぎを削り合うからこそ、チームはより強くなるのである。

沢谷香高校ナインは仁という内なる敵と戦い続けた結果、最早まごうかたなき強い「個」の集団……「戦闘集団」へと変貌を遂げていた。

強くなったもんだ

まさかこんな逆説的な切磋琢磨の形があったとは。

大鉄は笑いをこらえながら、感嘆のため息を吐き続けていた。

嬉しい誤算はそれだけではないのだ。

今日の仁である。

これ、カッターボールじゃねえか？

大鉄は思わず唸るしかない。

カットボールとは、「曲がるストレート」である。
ストレートが甘いコースにきたと見せかけ、バットに当る直前に
わずかに曲がる。

空振りよりも打ち損じを誘う変化球である。

今日の仁は、このボールで三振ではなく凡打の山を築いていた。

こいつ、こんなに器用だったか？

大鉄が驚くのは今日の仁が、血豆が潰れて滑る指を逆に利用して
いることだった。

先にも書いたが硬式のボールというのは指先の微妙な加減で意外
な変化をする。

指先が濡れていれば尚更であり、そのため、ルールでは故意に指
先を濡らす 例えば指を舐めたりなど ことを禁じているが、
出血の場合は不可抗力といえるのである。

アクシデントを逆に武器にしちまうとはな

本物の変化球投手というのは、雨の試合こそ真骨頂を見せるとい
う。

雨に濡れてボールが滑るのを利用して、普段より余計にボールを
グイグイと変化させてしまうのである。

だが、そのためにはそれなりのコントロールと冷静さが必要で、
並みの投手であればその変化に自分がついて行けず、投球が乱れ、
そのまま崩れてしまうものなのだ。

現に、この春の大会での仁は、雨で完全に自分を見失い大崩れし
ているのだ。

こいつも大幅に進歩してるってことか……それにしても

このチームは強い。

鉄壁の守りと、つながる打線、そしてなにより精神的に見違える
ほど成長した大エースの存在。

大鉄は感動のあまり叫びだしたい自分を抑えるのに精一杯だった。
一生こいつらと野球していたいくらいだ、と本気で思うほどだっ
た。

最後に麗華は。

うふ、ちょっとずるいみたいだけど、いいよね

麗華は血のにじんだ人差し指を見ながらニヤリと笑った。

先週の一回戦で初球がデッドボールになった理由を遠藤から聞いて、もしかしたらと思っていたらやはり期待が的中した。

ストレートを投げると、ボールが勝手に曲がってくれるのだ。

それもほぼ速球の速さで。

だが、麗華がそれを武器として使いこなせるには、彼女が元々持っていた幾つかの能力が作用していた。

一つには、麗華は指先が器用なのだ。

生まれつきの器用さにくわえ、中学時代の手芸部と高校でのリラックマクラブで鍛え抜かれた器用さは、野球部員の男子高校生などの比ではなかったのだ。

そしてもう一つ、麗華には武器があった。

それは並外れた辛抱強さである。

ひたすら仁を想い続けて耐えてきた我慢強さ。

くる日もくる日もクマのぬいぐるみを作り続け、手芸と裁縫で鍛え抜かれた根気よさ。

女性特有の粘り強さといってもいいが、麗華の場合その精神力が並みではないのだ。

ちよつとやそつとの制球の乱れで麗華の集中力が途切れることは、まずありえないのである。

つまり、これがなにを意味するか。

ずば抜けて器用な指先と不屈の精神を持った麗華の魂が、百四十七キロの速球を投げる仁の肉体に宿ったらどうなるか。

それは最早、普通の高校生が打ち崩せるなどというレベルではない。

か、勝った

「やった、勝った……勝ったのよ、あたしが……やったあああ」

麗華はこぼれるような笑顔で両手を挙げた。

「ナイスピッチャー」

大鉄をはじめナインがいつせいにマウンドに駆け寄り、麗華をねぎらった。

これも今までの沢高には見られなかった光景である。

「よくやったな」

と、麗華とハイタッチをしながら大鉄が笑う。

「とんでもない、みんながよく守ってくれたからよ、何度も危ない所を助けてもらったわ」

と、麗華は笑顔で答える。

こいつ、こんなにいいやつだったっけ？

八郎は麗華とハイタッチしながら首をかしげた。

試合は八対三。

麗華の成績は、奪三振六、被安打七、与四死球三　三失点のうち

二点は、エンリケのよそ見によるエラー。

傍目には、ほとんど話題性のない平凡な試合である。

だが、一流投手としての条件を全て兼ね備えた「怪物」が、この予選の、誰も見向きもしないような凡戦で、非常な難産をチーム全員の助けを借りながら　一人足を引っぱる者もいたが　人知れずひっそりと産声をあげたことは、観客をはじめ誰一人、麗華自身さえもこの時には気づいていなかったのである。

アザラシ物語

「跳べ……」

鳥羽の言葉には感情らしい抑揚がまるでこもっていない。

パソコンの読み上げ音声のような口調でそれだけ言うと、さっさとその場から離れてしまふのだった。

その顔も、能面のように無表情である。

「ごつつあんです」

鳥羽が離れるのを合図のように、二年生たちは一斉にジャンピングスクワットをはじめた。

「おい鳥羽」

鳥羽の行く手を主将の七篠が塞いで、その顔を見上げた。

「もう、いい加減にしてやれよ、大会中なんだぞ」

「だめだ」

鳥羽は七篠の目をまっすぐ見返すが、その目にも言葉にも気持ちもこもっておらず、犬の糞でもよけるようになってくると七篠を回りこんで歩き出そうとした。

「おい鳥羽」

七篠は鳥羽の腕をつかんで引き止めようとする。

「俺の右腕に触んじゃねえ」

鳥羽は鬼のような形相で、七篠の手を払いのけてにらんだ。

「俺はあいつらと賭けをしてるんだよ、二年のスタメン、一人の凡打一回につき百回跳べってな……」

三日月山高校ではスタメンに二年生が二人いた、つまり二人が四打数ノーヒットならば二年生は全員八百回跳ぶことになる。

だが昨日の試合で二年生のスタメンは二人のうちの片方が一本だけヒットを打ち、また、一応二人とも一本ずつ送りバントを決めたので、今日は五百回で許されていた。

鬼の鳥羽も犠打の分は許してやるらしい。

「参考までに教えておくが、エラーは一つにつき五百回だ」

鳥羽はたつぷりと皮肉を込めて、仏頂面でそう言った。

七篠は返す言葉がない。

昨日の試合でエラーをしたのは三年生だったのだ。

「気持ちは解るが、味方の体力を削るようなまねはよせよ」

「気持ち解る……だあ？」

鳥羽は鼻で嗤ってみせた。

「味方だってんなら三年も跳べよ。俺は失点一点につき千回跳ぶ約束してるぜ」

七篠は実直そうな眉を寄せて強く目を閉じ、鳥羽の言葉を呑み込むように何度も小さくうなずいてから、

「味方だよ」

と言った。

「俺は味方だよ……俺だけじゃない。ここにいる全員がお前の味方なんだよ。でも、打てないものは打てないんだよ、三振やエラーをしたくて試合に出てるやつなんて一人もいないよ。一生懸命やった結果なんだからしょうがないだろ」

「タマは打ったぜ」

鳥羽が言うと、七篠は再び言葉に詰まった。

「なんで打てたんだろうねー、今まで一度もフリーバッティングに混ぜてもらってないタマちゃんか？」

鳥羽は充血した目を見開いてそう言うと、七篠の返事を待たずに歩き出した。

ほんと、なんで打てたんだ……いや、なんであんなスイングができたんだ

昨日の試合。

「どうせ延長になるなら、こいつにも打たせてやってください」

自分の次の打者に玉川を代打に送る約束を監督にさせて、鳥羽は打席に向かったのである。

五番打者の代打である。

実のところ鳥羽本人も、やけくそだった。

まさか玉川が打てるとも思っておらず、また、監督がいくらなんでもそこまで鳥羽の意見を呑んでくれるとも思っていなかったのだ。だがどういいうわけか監督は了承し、そして奇跡的に玉川は打った。いや、鳥羽には奇跡には見えなかった。

玉川のスイングは、当然のように打つべくして打った一振りだったのだ。

鳥羽は玉川の姿を目で探した。

まさか、今日も洗濯しているわけではあるまい。

フリーバッティングのゲージの中にある玉川を見つけ、鳥羽は齒軋りをするのだった。

いまさら

玉川は今日、はじめてそこで打つことを許されたのだった。

三年間野球部に在籍していて、今日がはじめてである。

昨日の試合のご褒美とでも言いたいのか。

それが鳥羽の神経を余計に逆なでするのだった。

一生懸命なあ？笑わせるぜ、お前らの中の一人でもあいつくらいバット振ったやつがいたかよ

玉川はこの三年間、ほとんど毎日素振りをしていた。

他の部員が帰った後、全ての雑用を終えてから、一人グラウンドの隅で。

鳥羽が聞いた限りでは毎日二千回以上振っていたらしい。

鳥羽もそれに気づいたのは三年になってからだった。

それは偶然だった。

監督に見つからぬよう、ベンチの陰に隠しておいた携帯電話をそのまま忘れてしまい、探しに戻ったところ、真つ暗なグラウンドの端で玉川が一心不乱にバットを振っていたのである。

鳥羽は呆れながらも、翌日から日の出ている間くらいはつきあい、トスを上げてやったり、時には 本心に気が向いた時だけが バッティング投手をしてやったりしてきたのである。

だが、玉川は一向に上達する気配すらなかった。

「おい、俺と代われ」

鳥羽は玉川に投げているピッチャーと交代した。

先ほどから十球ほど玉川のバッティングを見ていたが、ジャストミートが一つもないため、じれったくなつたのだ。

「真ん中投げるから、ちゃんと打てよ」

玉川は左打ちである。

彼の父親は野球が好きで、高校までレギュラーで活躍するほどだったらしい。

その父親が、玉川が子供のころに期待を込めてわざわざ左打ちを教えていたのは鳥羽もよく見ていた。

だが、はじめのころこそ熱心に指導していた父親も、一年二年とたち、まるで上達しない玉川に見切りをつけて、五年生になるころには相手をしてくれなくなつた。

才能のかけらもない玉川の「左打ち」は、子供のころにはよく同級生たちにかかわれ、鳥羽はその全てを拳骨^{げんこつ}で沈黙させたのだが、実は当の鳥羽がそれを最も面白がっているくらいだったのだ。

そしてそれは、中学時代には無性な腹立たしさに変わり、高校生になつてからは痛々しく憐れにさえ思っているのだつた。

金属バットが軋むような音を立て、まるでバントのようなゴロが内野に転がった。

スイングの速さだけなら足利よりすげえのにな

鳥羽は苦笑いする。

玉川は、身を削るほど繰り返した素振りの甲斐があつて、スイングのスピードだけは高校生離れしていた。

「なんだよタマ、昨日の振りと全然違うじゃねえか」

鳥羽は二塁から見ていたのでよく分かる。

昨日はもつとこう、バットが生き物みてえに……

見ていた鳥羽も半信半疑である。

今でも信じられないが、ボールの方がバットに吸い付いて行くよう

なバッティング……それはプロでも一流のバッターのスイングだった。

「そんなこと言われたって、俺だって全然覚えてないんだよ」

玉川はそう言ってから、ど真ん中のゆるいボールを凡打し続けた。三球。四球。五球……。空振りこそないが全てひどいドンツマリだった。

このやろう、もたもたしやがって

鳥羽はだんだんイライラしてきた。

元々打てないならばともかく、現に昨日はできたではないか。

「昨日はできたじゃねえか、なんで一日たったらできなくなってるんだよ？」

鳥羽は腹立ちまぎれにわざと玉川の太ももを目がけて、少し強めに投げてやった。

鳥羽としては加減するつもりだったが、ボールが手から離れる瞬間、彼の気性が一瞬出てしまい、それは全力投球に近くなってしまった。

やばい強すぎるか？でもそこなら怪我もしねえだろ

「うわっ」

玉川は思わず悲鳴をあげたが、同時に、心地よい快音が糸を引いて、打球は美しいライナーを描き金網に当たった。

角度からいえばファールだったが、玉川は体をゴムのようにぐにやりと捻りながら自分の体に向かってくる鳥羽の速球を打ってしまったのだ。

「なにすんだよシゲちゃん」

玉川は泣きそうな顔で鳥羽を見る。

にらむのではなく哀願するような目である。

「それだよ」

解った、そういうことだったのか……

鳥羽は満足そうに一人でうなずきながら投球を止め、その場を去ってしまうのだった。

県立国分寺球場では、今大会四度目の沢谷香高校校歌が流れていた。地方テレビ局の放送室では解説者が、沢高ナインを絶賛している。

「藤村投手については言わずもがなですが、とにかくこのチームは攻・走・守のバランスが素晴らしいですね、私は春の大会もこのチームの試合を見ているますが、そのころと比べて、藤村投手をはじめメンバー全員が見違えるほど成長しています。例えば一回戦では藤村投手の乱調で非常に苦戦していましたが、春までのこのチームだったら、もしかしたらあのまま押し切られてしまったかもしれないん」

「藤村投手もそこから尻上がりに調子を取り戻してきたようですが……」
と、アナウンサーが言葉をつなぐ。

「なんと、二試合連続ノーヒットノーランです。明後日の準決勝では、これまた三試合連続ノーヒットノーランの記録を引っさげて勝ち上がってきました鳥羽投手擁する三日月山高校と対戦するわけですが」

「非常に楽しみな投手戦が期待できますね」
麗華はチームメイトに揉みくちやにされながら、本人が一番驚いた顔をしていた。

「あれ？今日もヒット打たれなかったんだっけ」

「てんめえ、とぼけくさって、このやるう」

八郎が満面の笑顔で麗華の肩を叩く。

「お前えがみんな三振させちまうから、こちとらヒマでしょうがねえぜ」

「だって、あたしだっていっばいいいっばいなんだもん、ごめんなちやーい」

「けっこう余裕あるじゃねえか、このやる、このやる」

「痛い痛い、あははは痛いってば。キャツキャツ……」

「すでにマブダチかよ、こいつら、いつの間にか？ハチローのやつ、

なんちゅうタンサイボー……」

牛若が目を丸くしながら呆れる。

麗華は三回戦と、この準々決勝で、合計三十七の三振を奪っていた。試合の結果は。

三回戦　六対ゼロ。

準々決勝　五対ゼロ。

最早並みの高校生では、麗華と沢高ナインの勢いを止めることはできなかった。

しかも三回戦の勝利者インタビューで麗華が、

「生きてるって、本当に素晴らしいことなんだと思いました……」
と、思わず漏らした本音が、言葉の真意はともかく、その初々しさと爽やかさから大勢の人々の感動を呼び、麗華はすでに、単なる高校野球県予選という枠をはるかに超えた人気者になってしまったのである。

胡桃美琉久セカンドバトル（前書き）

前話の訂正です。

アナウンサーのセリフが「明日の準決勝」となっていますが、「明後日」の間違えです。
訂正しておきます。

胡桃美琉久セカンドバトル

麗華が球場を出ると、色紙を持った小学生たちが駆け寄ってきて回りを囲む。

今や麗華はちよつとした町の人気者なのである。

「サインと、あの言葉を書いてください」

サインをねだる子供たちのほとんどはそう言ってきた。

麗華はこの何日かで「あの言葉」……生きているって素晴らしい

……という自分の言葉を写経のように何千回と書かされていた。

生きているって素晴らしい。

生きているって素晴らしい……。

ほんと、生きているって、こんなに素晴らしいなんて

麗華は書いていて、ふと涙が出そうになることがあった。

生きているって素晴らしい。

姫野麗華として生きていたころには、当たり前すぎてほとんど気にもかけないでいたこの言葉が、今の麗華にはもう手の届かない、過去に誤って捨ててしまった宝物のように思えてくるのだった。

もしもう一度、やり直せたら

だが、いくら後悔してみたところで自分は今もう手遅れなのである。後はこの子たちが自分のような過ちを犯さないように、この子たちの心に少しでもこの言葉が響いてくれたら。

それは懺悔と贖罪の行のようであった。

道ですれ違う人にはよく「生きているって素晴らしい、の人ですね？」などと声をかけられた。

中には間違えて「素晴らしい生きている人……」などと言う人もいた。

素晴らしい生きる……か

自分は今、他人から見て素晴らしい生きているのだろうか。

ついこの間、自殺したバカ娘だった自分が。

そういえばフィリップはあれ以来一度も現われないが、悪魔との交渉が難航しているのだろうか。

できればまだしばらくの間、このままの方がいいんだけど
「こら、ジンは芸能人じゃないのよ、あっち行けシツ、シツ」
うわっ、ミルク

どこからか間に割り込んできたのは胡桃美琉久だった。

「私がジンの恋人兼マネージャーなの、勝手にジんに近寄らないで」

美琉久はそう叫びながら、子供たちを手当たり次第に突き飛ばした。

中には小さな女の子も混ざっていて、転びそうになる子もいた。

「なにすんのよ、危ないじゃない」

麗華はあわてて女の子を抱きかかえ、美琉久をにらみつけた。

美琉久はあわてて「ごめんなさい」と謝ったが、その目は完全にそっぽを向いている。

「だって寂しかったんだもん。私のジんがすっかり人気者になっちゃって、私も鼻が高いんだけど、なんだかどんどん私から離れて行っちゃうみたいで……」

大げさに泣き声をあげて、そう言っつて拗ねて見せた。

よく恥ずかしげもなく出てこれるわね、今ごろ

「あんた、ずっと姿見せなかったけど、どこでなにしてたのよ」
顔なんて見たくもなかったけど

すると美琉久は、思い出したように「ごほん、ごほん」と咳をしてみせ、

「ず、ずっと風邪ひいてたのよ、応援にきたかったんだけどこられなかったの」

「じゃあちょうどよかったわ」

麗華はできる限りの毒を、顔と言葉に込めて言い放った。

「もう、あたしに近寄ってこないで、あんたの性質たちの悪い病気を感染っされちゃかなわないわ」

「なんですつて?」

美琉久は一瞬目を丸くしたかと思うと、思い切り顔をゆがめ、麗華をにらみつけた。

よくこんな表情^{かお}ができるものだと思心するほどの、ケダモノ丸出しの形相である。

「この子たちにも近寄らないでね」

「よくも私にそんなこと言えるわね」

美琉久の声が憎しみで震えている。

頼も気味の悪い生き物のようにワナワナと震えていた。

「毎日毎日、高級食材のお弁当を作ってあげたのに」

「そんなのあんたが勝手に寄越したんじゃない、誰もくれなんて言つてないわ」

「憶えてらっしゃい、このクソ野郎、後できつと後悔するわよ」

美琉久はそう言い残すと、くるりと背を向け去って行った。

群がる子供たちを「どきなさいよ」と怒鳴りつけ、肩を怒らせ、がに股で歩く後ろ姿は、二速歩行をするゴリラのようである。

「まったく、ああも顔つきが変わるもんかね」

牛若がそれを見送りながら肩をすくめた。

「七人の子は生^なすとも女に心許すな、ってやつだね、怖い怖い」

「あいつ、とんでもないワルだよ」

遠藤もいつの間にか後ろにきていてささやく。

「俺、なんとなく判るんだけど、気をつけた方がいいよ、ああいう女」

女の心を持った遠藤が言うとはひどく説得力があった。

「そうそう、はじめは処女の如く後は脱兎の如く、ってやつだね」

牛若がしたり顔でうなずいて見せた。

きやああつ……

部屋に入るなり叫びそうになる麗華の口を、フィリップの手があわてて塞ぐ。

「フィリップ……さん？本当にフィリップさんなの？」

麗華は恐怖に顔をひきつらせながら、やっと声をしぼり出して聞いた。

「よく分かったね」

フィリップはそう言って微笑んだつもりらしいが、その顔は醜く歪むだけだった。

フィリップの顔は、前よりひどくなっていた。ひどいなどと言うものではなかった。

右の眼球は飛び出してそのままぶらさがっていて、鼻は潰れ、顔は縦横にいくつも大きな裂け目が口を開けていて、しかも顔中にはまんべんなくひどい火傷の痕があり、髪の毛はほとんど全て焼けてしまったようで、わずかに残った根元の部分がこげて煤けていた。

「ほんとに大丈夫なの？そんな大怪我して」

「少したてば治るよ」

フィリップは全く頓着とんちやくしていないかのように、手を振って見せた。

「ひ……久しぶり、ね」

麗華は緊張しながらそう言った。

ついにきたか、当たり前だけど

「いやいや、すまんすまん、すっかり話がこじれてしまっただね」

「それじゃあ、ジンの魂は返してもらったのね？」

できればもう少しだけ、あのメンバーと野球をしたかったけどな

「いや、それが、だね」

とフィリップは言いにくそうに言葉を濁した。

「それが、まだなんだが……だが、今度こそ心配は要らないよ。霊界では特別救助隊を編成することになってね、今度は本物の戦士が一緒に行くことになったからね」

「そ、そうなの……」

麗華はそう聞いて、少しほっとしたような気持ちになるのだった。

「今日ここにきたのはその話ではないんだよ」

フィリップは少し、声に張りを持たせて続けた。

「これからはなにかと話が急になるだろうから、君にもいろいろと心の準備をしておいてもらおうと思ってるね」

「心の、準備？」

「彼ら救助隊が首尾よく仁君の魂を取り返せたら、その後すぐにでも本人の肉体に戻さなければならぬんだ、つまり、別の悪魔が臭いを嗅ぎつけてやってくる前に。そのため君はこれから数日の間、いつ何時仁君と入れ代わってもいいように、気持ちの整理をつけておいて欲しい」

「今度はそんな急な話になったんだ」

麗華は複雑な気分ですう答えた。

「まあ、さすがに今日中というわけにはいかないだろうが、この数日のうちには片付くだろう。だが、その入れ代わりのタイミングの約束まではできなくてね。君にとってそれは突然やってくることになるだろう。つまりそれは君の食事中になるかも知れんし、野球の試合中かも知れん。その時、君の回りに誰もいなければいいんだが、もし近くに誰かがいたら極力その人たちに不信感を持たれないように円滑に行動してほしい、ということだ」

「数日の、うちに……突然に？」

つまり、みんなにさよならも言えないってこと……

確かに最初から分かりきっていたことではある。

仁の体に入って、まだ二週間あまりだが、それは今までの麗華の人生の中で最も充実した日々だった。

友人もできた。

遠藤、八郎、牛若、エンリケ、そして……大鉄……。

今では皆かけがえのない仲間だった。

今までの十六年の人生と比べて、一度死んでからのこの二週間、この短い日々のなんと濃密なことであろうか。

しかし、それはあくまで仁の人生なのである。

つまりは借り物の人生でしかないのだ。

「ところで、君の方はぜひぶんとご活躍のようだが」

「うん、楽しかったわ……生きててこんなに楽しかったのってはじめでだった」

麗華は遠い目をしながらそう答えた。

この二週間の思い出に浸る一方で、仁の両親にも、野球部の友人たちにも、さよならの一言も言えない自分の立場が、無性に寂しく思えてくるのだった。

「やっぱりそう思ったかね？」

フィリップは声を弾ませてそう聞いてきた。

「実は霊界でも君への特例措置が検討されていてね、それが今日の二つ目の報告だ」

「特例って？」

「特別に君の転生の許可がおりそうなんだよ。同年代の人へのね」

「本当？」

麗華は目を輝かせた。

「君の予想外の頑張りに対しては霊界の評価もとても高くてね、それに、こここのところ君は自分の人生についてずいぶんと考え直したみたいだからね。そこで、転生先の家庭環境その他、君の希望などを聞きながら、できるだけ君の条件に合いそうな死者を選んで生まれ変わってもらおうと思うのだが。やっぱり次も女の子がいいかね？」

麗華は少し興奮しながら「そうね」と考え込んだ。

「男の子も悪くないけど……」

そこまで言ってから急に顔を真っ赤にして、

「やっぱり女の子がいいかな」

と言ったが、また慌てて「いや、でもやっぱり……」と首を振った。何故か目の前を大鉄の顔が横切ったような気がしたのだ。

なんであいつの顔がちらつくのよ

だがフィリップがその後と言った言葉は麗華を愕然とさせるのだった。

「ただし、転生をした後に今の君の記憶はなくなるがね」

「そ、そんな……」

「いや、これは当たり前だよ、前世や私の記憶を残した者に人間界をうろつろされては、なにかと混乱をきたすだけだからね、転生した後はその相手の人格になって、一生を過ごしてもらおうわけだね、これが」

「ず、ずいぶんと冷たいのね」

麗華はひどくがっかりして、やっとそれだけ言うのだった。

「それでも、自殺をした者に対しては前例のない破格の厚遇だよ」

「それを言われちゃうと、返す言葉もないんだけど」

「まあ、その後の自分の運命は自分で切り開くってことだね、カーマは気まぐれってことで……」

フィリップはそう言い残すと、窓から射し込む真っ赤な西日の中に溶けていった。

麗華はしばらくその夕日の中で呆然と自分の影をながめていた。やっぱり自分は仁の影武者、所詮この影のような存在にすぎなかったのか。

どこからか町工場の機械が、忙しげなりズムを刻む音が聞こえてくる。

その音につられて、自分の心拍も早くなっていくような気がした。だが、この心臓も結局は仁のものなのだ。

そして心臓から送り出される温かい血も、血管も、骨も筋肉も……。この体を出たら、そこで全てが終わる。

そう思うと涙が止まらなくなった。

そしてこのなん日かの間、心の中でなんども浮かんでは自ら打ち消し続けてきた甘い葛藤がはつきりと一つの想いとして形になるのだった。

麗華は最早、それを素直に受け入れるしかなかった。

大鉄……とうとうさよならも言えないのね

生まれ変わり、記憶が消された後で大鉄と再び出逢うなど、奇跡で

も起こらない限り、ありえないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9470w/>

彼に代わってピッチャー元カノ（仮）

2011年10月26日11時59分発行